

ローセフ
アレクセイ・フョードロヴィチ
(1893~1988)
人間—思想家—作家

V. ジダーノフ
鈴木 淳一

ЛОСЕВ
Алексей Фёдорович
(1893-1988)
Человек—Мыслитель—Писатель

В.Н. ЖДАНОВ
Д. СУДЗУКИ

- I. はじめに
- II. ローセフ略年譜
- III. ローセフ——その生涯
- IV. ローセフ——その人間性
- V. ローセフ——その思想
- VI. 『学問における永遠の青春』
- VII. ビブリオグラフィー

I. はじめに

昨年その生誕百年祭が祝われた、ロシアの大学者にして作家のアレクセイ・フョードロヴィチ・ローセフは、残念ながら日本では未だに殆ど無名のままに留まっている。業績は勿論、大人と呼ぶにふさわしき人間性もともに、深く子細な研究に値して余りあるにも拘らず。

ローセフ抜きにしては、20世紀ロシアにおける哲学、及び文献学の歩みを客観的に十全な形で展望することはできない。この偉大な長老は（彼が時にホメロスに、タイタンに、プロメテウスに、あるいはパーンに例えられるのは故なきことではない）、確かに全世界に普遍的なキリスト教文化の子孫ではあるとしても、しかし彼は何よりも先ず、ロシアの「銀の時代」直系の子孫に他ならないのだ。だからこそ彼はしばしば、「ロシアの『銀の時代』最後の哲学者」と称されるのである。ニコライ・ベルジャーエフ、ヴァチエスラフ・イワノフの弟子であり、セミヨン・フランクやパーヴェル・フロレンスキー神父の近しい友人であり、詩人パステルナークの同級生であり、社会主義神話論争においては身に覚えのないままゴリキーによって時代遅れの反動＝社会主義の敵に祭り上げられもしたローセフは、ただたんに当時の著名人の多くを知っていたばかりか、そうした人々の思想を実際にその身で生き、それらの思想を咀嚼・消化し、時代評価や未来の予見までも含んだ独創的で自立した自前の思想にまで発展させていったのである。

ローセフの思想の源流は、ヴラヂーミル・ソロヴィヨーフの哲学であるが、現代から眺望すれば彼の思想は、ソロヴィヨーフを始祖とし、セルゲイ・ブルガーコフ、ベルジャーエフ、イワノフ、エヴゲニー・トルベツコイ、フランク等々の逸材が取り組んだロシア正教哲学の発展過程の掉尾を飾っているかのようである。ソロヴィヨーフに始まった円環がローセフによって閉じられるのである。師や同僚を越えて生き長らえ、ために精神的真空の時代に遭遇し、30年代の弾圧も経験しなければならなかった彼は、10月革命からペレストロイ

ローセフ・アレクセイ・フョードロヴィチ (V. ジダーノフ・鈴木淳一)

カに到るまでのソヴィエト・ロシアのあらゆる悲劇の生き証人として、自らのそうした有り余る体験を哲学的に思索吟味したのであり、恐らく他の誰よりも深く、入念に 20 世紀ロシア社会発展の様々な法則性を描破したのである。しかもそれは、厳しい検閲の目の輝きの下では、易々とできたのではなかった。言葉を慎重に選び、さらに幾重にもヴェールにくるむという難渋な筆使いの要求の中で行われたのであった。

ローセフには、哲学、文献学を中心に、多岐の分野にわたって、その数およそ 600 に及ぶ著作がある。その中でも最大の労作は、8 巻からなる古代美学史である。この著作を高く評価した日本の稲森財団は、ローセフに京都賞の授与を決定したが（精神文化・表現芸術部門）、残念ながらローセフ自身はその死によって賞を受け取ることができなかった。

ローセフはまた独創的な作家でもあった。プラトンやソロヴィヨーフの対話編、それにドストエフスキーの思想小説に範を取った彼の哲学的な散文作品は、ロシア文学では他に類を見ないものである。

ここに提供するささやかな論文は、何よりも第一に啓蒙を目的としている。我々は、日本で人文科学の研究に従事するなるべく多くの人々に、この巨人的な学者・作家の生涯、学問的探求、創作について、たとえアウトラインのまたアウトラインに過ぎないものにせよ、是非とも知っていただきたいのである。我々のこのささやかな論文が、読者の目に止まり、僅かなりとも興味を掻き起こしてくれることを期待してやまない。そして、なろうことならローセフ研究の芽が生まれ、既に数冊は英語、ドイツ語、フランス語、ブルガリヤ語、ポーランド語、中国語等々に翻訳されている彼の著作が、日本語にも翻訳される日がくることを心から祈りたい。

II. ローゼフ略年譜

<1893 年>

9月23日、ロシア南部ドン地方の州都ノヴォチェルカスクに、ギムナジウムの教師の家庭に生まれる。

<1902 年>

ノヴォチェルカスクのギムナジウム入学。

<1903 年>

後にその名を広く知られることになる若きバイオリニスト、セシリア・ハンセンのコンサートに強く影響されて、イタリア人教師Φ.スタッジの音楽学校のバイオリン科に入学。

<1911 年>

6月、ギムナジウムを優秀な成績で（金メダル授与）卒業。音楽学校バイオリン科を修了。8月、モスクワ大学史学文学部に入学。10月、ソロヴィヨーフ記念宗教哲学協会を訪問するようになり、そこでセルゲイ・ブルガーコフ、ニコライ・ベルジャエフ、セミヨン・フランク、イワン・イリイン、等々といった錚々たる哲学者たちと知り合う。

<1914 年>

ベルリンに留学し、王立図書館で古代の研究に従事するが、第1次世界大戦勃発のために中断。

<1915 年>

6月、モスクワ大学の2学科（哲学科と古典語・文学科）を同時卒業。

<1916 年>

処女論文『プラトンにおけるエロス（“Эрос у Платона”）』、及び音楽の原理に関する論文を2作発表。

<1917～1919 年>

学位論文執筆。

ローセフ・アレクセイ・フョードロヴィチ (V. ジダーノフ・鈴木淳一)

<1918 年>

ソロヴィヨーフ記念宗教哲学協会の活動禁止。

<1919 年>

全国公募の採用試験を経て、ニージニーノヴゴロド大学教授に選出される。

<1922 年>

ソヴィエト政府の決定により、ベルジャーエフ、フランク、イリイン、トルゥベツコイ等を始め、宗教哲学協会のほぼ全メンバーが国外に追放される。親しい友人であり、思想的同志であるワレンチーナ・ミハイロヴナ・ソコロワと結婚（彼女はモスクワのいくつかの工科大学で天文学と数学を終生教えた）。

<1923 年>

ソヴィエト政府の決定による人文系の全学部閉鎖に伴い、モスクワ音楽院の教授となる。

<1927～1930 年>

哲学に関する主著『論理学の対象としての音楽（“Музыка как предмет логики”）』『名称の哲学（“Философия имени”）』『神話の弁証法（“Диалектика мифа”）』等々が発表される。

<1930 年>

5月18日、『神話の弁証法』中に検閲で差し止められた箇所を無断で挿入し、公表したとの理由で、国家政治保安部によって逮捕される。6月5日、妻ワレンチーナ・ミハイロヴナ逮捕。

<1930～1933 年>

国家政治保安部の留置場に、4カ月の独房収監も含めて数カ月間留置された後、収容所送りとなり、白海バルト海運河建設に従事。その間、1932年に建設現場でシベリアのアルタイ地方に流されていた妻ワレンチーナ・ミハイロヴナに再会。

<1933 年>

始めにワレンチーナ・ミハイロヴナ、すぐに続いてローセフが釈放され、モ

スクワに帰還。収容所での3年余に及ぶ強制労働のため、視力を殆ど失う。

<1933～1942年>

モスクワでの就労が許可されなかったため、クウイブウイシェフ、チェボクサールウイ、ポルタワといった地方都市大学に奉職。その間、1941年8月11日、モスクワのローセフの自宅が爆撃によって破壊され、妻の母親、原稿、古文書、蔵書を喪失。

<1942年>

短期間モスクワ大学に奉職するが、その「観念論」を批判され、辞職を余儀なくされる。語学・文学博士号取得。レーニン名称教育大学に教授の職を得、以後他界するまで奉職。

<1953年>

3月、スターリン他界に伴い、著作の発表を許可される。

<1954年>

1月29日、白血病のためにワレンチーナ・ミハイロヴナ逝去。後に、教え子であるとともに、思想的同志であり、多数の著作の共作者でもあるモスクワ大学教授のアザ・アリベコヴナ・タホ＝ゴヂと再婚。彼女は夫の功績の不朽化に全人生を捧げることになる。

<1963年>

最主要作品である、8巻に及ぶ浩瀚な『古代美学史（“История античной эстетики”）』の第1巻が公刊される。

<1983年>

検閲との激しいやりとりの後、アンドローポフの個人裁量によって『ソロヴィヨーフ（“В. Соловьёв”）』出版。これにより、ソ連時代において初めてソロヴィヨーフが解禁された。

<1986年>

『古代美学史』に対し、ソ連国家賞授与。

<1988年>

5月24日、ローセフ逝去。

III. ローセフ —— その生涯

人は、もしも「20世紀という、自分には縁もゆかりもなければ、まるで理解もできない闘争が降りかかってくるような社会的・歴史的時代に投げ込まれた」なら、どうすればいいのであろう。

1914年、図書館での研究を目的にベルリンに留学したその人間は、寝耳に水の世界大戦の勃発によって、志し半ばでの帰国を余儀なくされる。そして、帰国した彼は、ソロヴィヨーフを記念して設立された宗教哲学協会に足繁く通い、そこで多くの師を、沢山の思想的同志を見い出すが、そこに突然降って湧いたように革命の嵐が襲いかかる……協会は解散の憂き目に会い、友人という友人、師という師は殆ど全員国外に追放されてしまう。革命の嵐が国内の人文系の学部を全て閉鎖してしまった時、哲学者であり、語学・文学者であるその人間に、一体どんな道が残されているのだろうか。それなりに快適な書齋の中で絵画や書籍に囲まれて仕事をすることに慣れてしまった人間が、突然逮捕され、何千という囚人ともども収容所に送られ、白海バルト海運河建設に従事させられことになった時、彼に一体何ができるだろう。彼が2度にわたり、数十年を費やして築き上げた蔵書も、やがて辿り着くのは略奪と破壊の世界でしかないのである。彼の全生涯の目的は書物を書くことだというのに、それが禁止されてしまうのである。学問に専心すること、それだけが生きる目的だというのに、行く手に待ち受けているのは、戦争、革命、逮捕、流刑、差し押さえ、迫害、尋問、疾病、そして何にもまして恐ろしい失明という、個人の意志と能力では如何ともし難い無数の障害だけでしかない時、彼は一体どうすればいいのだろうか。それは運命といって済ますには余りに悲惨な、進むも戻るもままならない出口無しの挟撃的状况である。そして、他ならぬそうした状況こそ、ロシアの傑出した学者であり作家のアレクセイ・フョードロヴィチ・ローセフに降り懸かった運命なのである。

しかし、ローセフが考えたように、運命とは決して自由、あるいは自己実現

のための闘いを排除するものではない。運命に妥協し、時代の流れに身を委ねることも可能なら、また同時に意識してヒロイズムの一步を踏み出し、自らの人生のために、自らの人生の目的実現のために運命と闘い抜くこともできるのである。ローセフが選んだのは後者、即ち運命に対するヒロイックな徹底抗戦の道であった。そうしてこの闘いを闘い抜いた彼は、晩年にはモスクワで最も有名な、誰からも敬愛される教授となり、アルバート街のアパートに、絵画と古代の彫像の飾られた、生涯3度目の立派な蔵書を備えた書斎を持ち、およそ600もの学術論文を、失明にも拘らず、妻と秘書たちの献身的な手助けによって、発表することができたのである。こうした人生航路に預かって力があつたのは何かと問うなら、知性、経験、学識、信仰、友人知人の助力、等々様々なファクターを挙げられるだろうが、それは何よりも彼の人格に染み込んだ強烈な目的意識に貫かれた精神的強靱さであろう。彼がその出自を誇り高くも自由を愛するコサックの家系に持ち、そのことを常に自慢に思っていたというのも、だから理由のないことではないのである。現代では、コサックという概念の復活とともに、思いがけずに改めて自らの出自がコサックであることに多くの人々が思いを致し始めているが、かつてはコサック出身を誇るのは危険な行為ですらあつたということも、ちなみに想起しておこう。

ローセフは、1893年9月23日、ロシア南部に位置する、当時ドン地方のコサックの中心地であつた（公式にはヴォイスコ・ドンスコイ州都）ノヴォチェルカスク市に生まれた。父フョードル・ペトローヴィチはギムナジウムの数学の教師であつたが、熱烈な音楽愛好家で、ある時教師の職も家族もなげうって、旅回りの音楽家となつて、あちこちの地方オーケストラで指揮者を務め歩くようになってしまったほどだつた。母ナタリヤ・アレクセーヴナは、伝統的で整然とした生活様式を保持しようとする、規律に厳格な信仰心の篤い女性で、鐘楼の天辺によじ登り、鐘を鳴らし、フランスの天文学者K. フラマリオンの空想小説を読み、バイオリンの演奏に何時間でも聞き惚れているのが何より好きな息子の教育に全精力を傾けたのだつた。ローセフが学んだノヴォチェルカスクのギムナジウムには、教養高く博識で、生徒たちに友人のように接す

る開放的な素晴らしい教師連が揃っていた。例えば、チェコ人の古典語教師 H.A. ミクシは、ローセフに古代への情熱を培ってくれたし、校長の Φ.K. フロロフは、将来ローセフの学問上の導きの星となる B. ソロヴィヨーフの著作集をプレゼントしてくれたのであった。かくして、ソロヴィヨーフを導きの星として古代学と哲学に打込んでゆく思想家ローセフの主要な精神的方向性は、ギムナジウムの時代に既に形成されていたのである。ローセフにはさらにもう一つの大きく燃え盛る情熱があった。後に彼の運命において大きな役割を演じることになるそれは、音楽に対する情熱である。彼は音楽の勉強に多くの時間を割いたし、また優れたバイオリニストでもあった。彼は音楽においても師に恵まれていた。彼が教示を仰いだのは、運命のいたずらによって南ロシアに逢着することになった、フィレンツェ音楽アカデミー出身の有名なバイオリニストであり、優れた教師でもあった Φ. スタツジだったからである。

1911 年、ローセフはギムナジウムを最優秀の成績で卒業するとともに、スタツジの音楽学校のバイオリン科も卒業し、モスクワ帝国大学の史学・語文学部に、しかも同時に 2 学科に（哲学科と古典語・文学科に）入学している。モスクワの精神風土に包み込まれた若きローセフは、眠る暇をも惜しんで、劇場の封切りを始め、オペラ、コンサート、有名教授の授業、詩人の朗読会等々、とにかく目と耳に入るもの全てを見聞きし、何でも吸収しようとした。その中でローセフの関心の中心を占めて行くことになるのは、ソロヴィヨーフを記念して結成された宗教哲学協会での集会に参加することであった。その集会は毎月、ロシアの哲学者の庇護者である、百万長者の商家の奥方マルガリータ・キリーロヴナ・モローゾワの豪邸で開催されていた。ローセフはそこで、E. トルゥベツコイ、C. ブウルガーコフ、H. ベルジャーエフ、C. フランク、B. エルン、C. ドゥルィリン、H. イリイン、Π. フロレンスキーといった当時のロシアの最良の哲学者たちに出会った。アルバート街のベルジャーエフ宅を訪問し、フランクと親交を結ぶ機会にも恵まれたが、誰にもまして親しい関係を持ったのは、象徴派の詩人で哲学者のヴァチェスラフ・イワノフであった。その後生涯を通じてローセフはイワノフを自らの師として、精神的指導者として敬愛

してゆくことになる。同じ頃ローセフはまた、未来の大詩人ボリス・パステルナークとも交際を始めている。同じモスクワ大学生ながら、ローセフほどに金銭的に困窮していなかったパステルナークは、家庭教師をしている自分の生徒数人をローセフに譲ってくれたりしたのであった。

しかし、こうした至福の時代も——知的欲求の赴くままに哲学に、音楽に、芸術に一心不乱に全身全霊を傾けて、それを拒むべき何ものもないという時代も——そう長くは続かなかった。戦争が、続いて革命が始まり、彼の運命は次から次へと打撃を被ることになるからである。最初の打撃は1914年であった。その年、古代に魅了されたローセフは、古代の研究にかけては当時のヨーロッパで最高の成果を誇っていたベルリンに赴き、王立図書館での古代研究とともに、夜毎好きなワーグナーのオペラ通いを開始したのであったが、ほどなくして勃発した第1次世界大戦のために早々に帰国せざるを得なくなってしまうからである。しかも打撃は、研究の頓挫だけにとどまらなかった。帰国途上の混乱は、彼から様々な原稿、メモやプラン、書籍を奪ってしまったからである。だが、こうした打撃も紛失も、その後も再三にわたって彼の運命を見舞うことになる不幸のほんの序章に過ぎなかったのである。

1915年に大学を卒業したローセフは、学究生活に没頭し、翌16年には、最初の学問的成果として、『プラトンにおけるエロス』と音楽に関する2つの論文を世に問うている。

この時点ではまだ、眼前に迫っていた筈の社会の激烈な地殻変動は、それを予感させるような兆候を何一つ見せてはいなかった。後年ローセフは、結局は最後の訪問となってしまった1917年の夏の故郷ドン地方訪問のことを、その時の故郷の豊かで平安に満ちた幸福な生活のことを、1919年にチフスのために帰らぬ人となる母との最後の出会いのことを、一度ならず回想している。しかし、一見無風に見えた祖国に革命が、突如の嵐のような雄叫びを上げ、彼のあらゆる目論見を、人生設計を粉微塵に打ち砕いてしまうのである。1918年には、C. ブルガーコフ、B. イワノフとともにロシア正教哲学に関する一連の双書を刊行する予定であったが、その出版はたちどころに禁止され、出版の

禁止とともに宗教哲学協会もまた、反革命的とのレッテルを貼られて閉鎖されてしまうのである。そして1922年には、ソヴィエト政府の決定によって(レーニン個人に提案によるとも言われる)、ブルガーコフ、ベルジャーエフ、フランク、トルゥベツコイ等々といったローセフが師と仰ぐ人々のほぼ全員が、ソヴィエト政権の精神的敵対者として国外追放に処されてしまう(この時国外追放に処された学者の数は、総勢で約200名にのぼる)。ローセフ自身はこの措置の対象にはならず、国内に留まって教育・学究生活の継続に腐心して行くことになる。ローセフは革命から2年経った1919年、全国選抜試験でニージニーノヴゴロト大学の教授に選出され、そこで数年の間哲学と古代学の講義に熱弁を振るっている。しかし、その後間もなくして、国内の全ての人文系の学部がプロレタリア国家(=ソヴィエト国家)には無用のものとして閉鎖されるに到り、文学、語学、哲学の教師は失職を余儀なくされる。この時ローセフを救ったのは、その音楽的教養であった。そのおかげで彼はどうにかモスクワ音楽院に教授の職を得ることができ、そこにかかなりの長期間(1922年~29年)勤務している。またこの間、音楽院以外にも国立音楽学研究所(ГИМН)の非常勤講師を勤めたり、国立芸術アカデミー(ГАХН)でも時折講演、講義を行っている。当時の芸術アカデミー所長П. コーガンは非常にリベラルな人物で、貧窮に喘いでいる学者の援助に熱心であり、あらゆる形でアルバイトを提供していたのである。こうした困難な時代にローセフを支えた最大の力は、彼の妻ワレンチーナ・ミハイロヴナであった。彼らが知り合ったのは1919年のことで、ローセフがたまたま広告で見つけて間借りすることになった先が、彼女の両親のアパートだったのである。こうした機縁で知り合った二人であるが、結婚したのは知り合って3年後の1922年のことである。ワレンチーナ・ミハイロヴナは結婚以来終生、常にローセフの学問的にも、宗教的にも思想を同じうする最大の親友であり続けた(彼女もローセフ同様非常に信仰心の深い人だった)。彼女自身、天文学と数学に打ち込む学究の徒であり、天文学の修士号を取得し、生涯モスクワの技術系の諸大学で教鞭を振るい、大いに尊敬を集めたのであった。

ワレンチーナ・ミハイロヴナが逝去した後ローセフの妻となったアザ・アリベコヴナ・タホ＝ゴヂは、ワレンチーナの容姿、人となりについてこう書いている——「ワレンチーナ・ミハイロヴナは、非常に自立心の強い独立不羈の血気盛んな性格の人でした。彼女は如何なる権力をも恐れず、どんな人とでも話を交わすことができるし、どんな人の中にも、たとえどんなに深く隠れていようと、必ずやはっきりとした、あるいはぼんやりとした善意を見つけることができるものだと感じていました。困った人がいたらすぐにでも援助の手を差し伸べようとするその敏感な同情心は驚くほどでしたが、全く自然発生的なものでした。すらりとした長身で痩せ気味の彼女は、繊細そのものの、すぐにも砕けてしまいそうな感じの美人でした。亜麻色の髪と大きな灰色の目を持ち、顔の輪郭は端正で、長い指の細長い手をしていて、いつも黒い服を着ていました。しかし、こうした見かけの脆さの陰には、桁外れの意志力が潜んでいたものであり、彼女の手に残る困難などありませんでした。彼女は自分の人生の全精力を夫であるアレクセイ・フョードロヴィチ・ローセフのイデーの実現のために捧げたのでした」(宗教哲学雑誌「原理 (Начала)」1993年、2号、109頁)。

革命によって思想的同志との紐帯を断たれ、何百万という人々とともに歴史の大きな渦に巻き込まれたローセフは、その時ロシアに何が起きているのかをしかと見定めようと決意し、真実を追い求めて哲学的思索の世界に沈潜して行った。この哲学的な思索の結果は、1927年～30年の足掛け4年の期間における、『名称の哲学』『論理学の対象としての音楽』『神話の弁証法』を始めとする8冊の著作の矢継ぎ早の刊行となって結実している。これらの著作でローセフは、自らを名称と数と神話の哲学者と宣言し、そこで彼自身の弁証法を披瀝しながら、ロシアの運命について思考を巡らせている。そこでの彼の立場は、ヴラヂーミル・ソロヴィョーフの遺産の直接的後継者としてのそれであり、以後彼は、19～20世紀ロシア宗教哲学の系譜の最後に位置する哲学者とみなされていくことになる。ローセフはその最良の著書の一つ『神話の弁証法』の中で、社会主義イデオロギーと共産主義的プロパガンダに対して公然と

した批判を展開しているが、それは前代未聞の、蛮勇とも呼ぶべき果敢な行為であった。恐らくそれは、ペレストロイカとグラスノスチ以前では、ソ連で出版された公開の文書上で社会主義体制が愚弄嘲笑された唯一の例であろう。ローセフは意識的に検閲を欺くことによってこれを成し遂げたのである。当時はまだ自費出版が、即ち、検閲を受けた後の原稿を自分で出版社に持ち込み、自費で印刷出版することができたのだが、彼はこの制度を利用し、印刷の段階で検閲後の原稿に、どんな検閲でも絶対に許可されないような断片を数カ所つけ加えたのである。それにしても、彼は何故にそうした自殺的とも言える暴挙に走ったのであろうか？囚われの身となってから妻に書き送った手紙の一つで、彼はこう説明している——「当時の私はもう根っからの哲学者になってしまっていたので、ソヴィエトの検閲のたがの中に自分を抑えておくのが難しかったのだ（それにそんな必要があったらろうか？）〈略〉私は自分の意見を吐露できない状況に窒息しそうだったんだ。そんな訳で、検閲後自分の著作の中に、『神話の弁証法』もその一つだが（しかもそこではとりわけて）、禁制の断片をこっそり挿入したのだ。危険なことだと知ってはいたが、自分を表現したい、哲学者として、作家として花開きつつある自分の個性を表現したいという欲求が、危険に関するあらゆる想像力を凌駕してしまったのだ」（タホ＝ゴヂ「ローセフ。その生涯と創造の運命」。ローセフ『ヴラヂーミル・ソロヴィヨーフとその時代』所収。691頁）。

当局の反応は凄じかった。スターリン子飼いの部下であるカガノーヴィチ自らが、第16回全ソ共産党大会の演壇上からローセフを糾弾し、さらにはゴリキーが「プラヴダ」と「イズヴェスチヤ」紙上の二つの論文で、ローセフを「無分別」、「無知」、「気違い」、「白痴」、「盲」と呼んで、激しく非難したのであった(注)。

1830年4月18日、ローセフは逮捕され、モスクワの国家政治保安部本部(ルビャンカ)に数カ月間拘留されたが、そのうちの4カ月間は独房生活であった。判決は当時としては厳しいもので、10年間の収容所送りであった。ほどなくして妻ワレンチーナも逮捕された。彼女に下された判決は、5年間の

収容所送りであった。収容所での白海バルト海運河建設の厳しく激しい強制労働の結果、ローセフは発病し、身体障害者となってしまう。重労働不適格と認定された彼に割り振られたのは、薪材倉庫の守衛であった。最北の僻遠の地で、図書も机も持たず、如何なる学究生活を営む可能性もないままに、守衛の勤めを果たしながら、それでもローセフは学問への情熱を途絶えさせることはなかった。北国の長い夜また夜に、星空を眺めながら、彼はいつの日か世界に問われる筈の書物を書き続け、記憶を鍛錬することによって数学の研究にも多くの時間を割いたのであった。彼の健康は悪化の一途を辿り、守衛さえ勤まらなくなると、次に事務局に回された。そこでは、湿っぽい巨大な地下室を照らすちっぽけなたった一つの電球の下で、日に12～14時間も統計用カードに書き込みをしなければならなかった。ローセフの病んだ近視の目は、この非人間的な過重労働に耐えきれず、加速度的に光を失って行った。収容所の医師たちには、何の治療を施すこともできなかった。

やがて、親類縁者を始め、レーニンの妹 M.H. ウリヤノワ、ゴーリキーの妻 E. ペシコワといった多大な影響力を持った女性たちの根気強く熱心な働きかけの甲斐あって、先ずワレンチーナ・ミハイロヴナが、その後間もなくしてローセフ自身が、刑期満了以前に釈放される。彼らに発行された証明書には、「身体障害、及びその突貫作業に免じて釈放」と記されていた。この証明書のおかげで彼らはモスクワ在住をも許可されることになるのだが、モスクワでは更なる一撃がローセフを待ちかまえていた。かつて彼らが暮らしていたアパートには国家政治保安部職員が居を構え、何千という貴重な本を無造作に捨てるか、無用の古紙として利用するかして、蔵書を無惨に破壊し去っていたからである。古文書と原稿の殆どは押収され、チェカー（反革命・サボタージュ及び投機取締非常委員会）の手で、跡形もなく消滅させられていたからである。学問の人ローセフにとっては、これらの喪失は、もしかしたら自分の逮捕以上の痛手であったかも知れない。

ところで、ローセフはただ単にモスクワ在住を許可されただけであって、そこで教職に就くことは許されなかった。そのため彼は数年の間、あちこちの地

方の大学の教師として糊口をしのがなければならず、クウイブィシェフからチェボクサールへ、さらにはポルタワへと移り住んだのであった。地方の大学教師の待遇は大体が、満員列車での移動、寒くて不潔な住宅、毛布代わりに外套の使用、貧弱な図書館、粗末な食堂、一挙手一投足を見逃さず密告する同僚、といった具合で、ひどく過酷なものであった。しかし、こうした過酷な条件にも拘らず、ローセフは常にその真理探求の渴望によって学生たちを感化し、彼らを「マルクスの学説は無謬全能である、何故ならそれは正しいものだからである」といった公式的な教条主義から、紋切り型のお役所学問から引き離そうと努力したのである。優れた雄弁家であり、博学であり、古代学と哲学に通暁しており、生きた思想を何よりも高く評価する有能な教育者のローセフは、その語り口と講義とでもって聞く者全てを魅了し、瞬く間に学生最愛の教師となったばかりか、少なからぬ学生の生涯の師ともなっていたのであった。

1930年代末になると、ローセフはモスクワでの就労を許可され、ほんの短い期間とはいえ、モスクワ大学でも教鞭を取るようになる。やがてその実力によってモスクワ大学哲学科の主任教授まで予定された彼だが、結局それはかなわない夢でしかなかった。宗教哲学協会との関係、国外追放となった哲学者たちとの交友、そして何よりも『神話の弁証法』における正面切ったの社会主義批判などの前歴の故に、権力側はこの著名な哲学者を疑惑の目で眺めていたからである。当局はしばしば彼の観念論を審議の俎上に乗せた。妻ワレンチナ・ミハイロヴナはこう回想している——「ローセフは、プラトン主義者であり、ヘーゲル主義者、シェリング主義者、フッサール主義者、ベルグソン主義者であるとともに、神秘主義者であり、スコラ哲学者であり、折衷主義者でさえある、と認定された」(「原理」、1993年、2号、113頁)。しかし、こうした審議は間もなく中止された。ローセフと議論するのはそもそも困難であり、後には不可能になったからだった。正統マルクス主義者たちとの論争でローセフが武器としたのは、微を入り細を穿って研究し、論敵以上に知り尽くしたマルクス、エンゲルス、レーニンの著作からの引用であった。ローセフは、彼の観

念論に対するあらゆる批判を、マルクスの著作からの、著作の題名、発行年度、巻数、頁数への言及を含んだ、正確で適切な引用によって、ものの見事に論破したのである。彼の論敵はその時、当然ながら、困惑の色も露わに沈黙する以外、なすすべがなかった。その結果ローセフは、公式的に「観念論を克服したマルクス主義哲学者」とみなされることになった。だが、それにも拘らず、何故かモスクワ大学での教職の道は閉ざされ、1942年からこの世を去るまで、モスクワ教育大学の言語学学科で教鞭を振るうことになるのである。

新たな厳しい試練がローセフに降り懸かったのは、第2次世界大戦が始まった時である。8月のある晩、ドイツのフガス投下爆弾の一つが、彼の自宅を直撃し、原稿、古文書、蔵書を灰塵に帰してしまったのである。この時モスクワ市議会はローセフに、18世紀に建てられた由緒あるビルのアパートを新居として提供したが（アルバート街33番地、20号室）、彼はこの世を去るまでここに暮らしている。

ローセフを何よりも圧迫し、悩ませたのは、出版の禁止であった。思想家、作家として自己を表現する可能性を奪われることは、彼にとっては地獄の苦しみ以上の責苦であった。ローセフ夫妻は一時たりとも印刷出版への希望を失うことなく、粘り強い努力を重ねたのであったが、あらゆる出版社、あらゆる編集部の返答は拒絶ばかりであった。数学は政治とは無縁との考えから、ローセフは数学の哲学に関する著作をものし（『数学の弁証法的基礎』）、妻ワレンチナはそこに序文を寄せているが、この著作も結局は陽の目を、しかも今日まで、見ないままになっている。

ローセフが出版を許可されたのは、やっとスターリンが死んだ1953年以後のことである。出版を許可されたローセフは、あたかも生まれ変わったかのようであった。しかし、この幸福も、残念ながら妻と分かち合うことはできなかった。1954年、彼女は白血病でこの世を去ってしまうからである。彼女は死を目前にして、夫の最も身近な教え子であり、彼ら夫婦の近しい友人でもあったアザ・アリベコヴナ・タホ＝ゴヂに、自分亡き後、夫と結婚し、夫の身の回りの世話と夫の学究生活のための万全の配慮をしてくれるよう遺言したと

言われている。ダゲスタン自治共和国のダルギン人革命家で、30年代に多くの革命家とともに銃殺刑に処されたアリベク・タホ＝ゴヂと教養豊かなコサク娘との間に生まれたアザ・アリベコヴナは、この遺言をよく守り、ローセフに最大限の心遣いを示し、学究生活にこの上のない環境を作り上げたのであった。アルバート街のローセフのアパートは、独特な雰囲気を持った哲学と宗教の一大センターと化し、著名な哲学者や作家、学者や大学院生のみならず、名もなき大学生までもが絶えず来訪しては、新しい知識や思想に満たされて意気揚々と引き揚げて行くのだった。ここで忘れてならないのは、こうしたこと全てが、公式的には唯一マルクス主義の共産主義思想だけの信仰が許されていた時代の出来事だということである。

出版の自由を手に入れたローセフは、決壊寸前のダムの水門が開け放たれたかのように、次々と作品を世に問い始めた。既に60の峠を越えていたにも拘らず、休日や祝祭日には勿論、家屋の修繕だとか別荘行きだとかいった、ローセフ自身の言い草を借りれば「日常的些事」には一切脇目を振ることなく、全身全霊を傾けて執筆に没頭したのである。殆ど失明状態の彼の仕事を助けたのは、第一に妻であり、そして友人、秘書たちであったが、彼はそうした助力者に対し、報酬を惜しむことはなかった。ロシアにおいて彼以上の著作をものした学者はいない、と言っても恐らく過言ではあるまい。執筆し、発表すること、即ち自分を表現すること、それが彼の人生の全てであった。しかし、グラスノスチまではまだ遥かな径庭があったこの時代、検閲の目は依然厳しく、削除のメスは情無用であった。ローセフにとって、だから、作品を検閲のメスをかいくぐって自分の意図通りに発表するために苦労は、並大抵のものではなかった。その思想と信条の直接的な表現など夢物語であり、それらはいつでもマルクス・レーニンからの無数の引用によって粉飾されなければならなかったのである。そうした闘いがどれほど困難であったかは、一例として『ヴラデーミル・ソロヴィヨーフ』(1983)出版の顛末を振り返って見るだけで十分であろう。ソ連時代には公開が禁じられ、大多数の人々にとっては未知の存在であった哲学者ソロヴィヨーフの復権——ローセフはそれこそ人生最大の

事業と考へ、長い年月をかけての各方面への地道な働きかけを土台とした入念かつ慎重な下準備の果てに、やっとのことでパンフレットまがいの小冊子とはいえ、ソロヴィヨーフに関する著作の出版許可を取り付けることに成功する。しかし、出版許可を取り付けたのも束の間、印刷に回される寸前になって、ふとしたことからその原稿を目にした正統共産主義者のアカデミー会員が、一読するや否や、観念論を標榜する宗教哲学者の著作の出版を由由しき事態とみなし、一大スキャンダルを巻き起こしたために、出版は即刻禁止の浮き目に会ってしまったのである。

この時期、ローセフは目にするのものはばかられる程に意気消沈していた。すっかり憔悴しきって、顔色は悪く、急激に老け込み、食べるも寝るもままならない様子であった。普段は人づきあいが良くて陽気な彼も、さすがにこの時期は、あたかも近しい人を失ったかのように、交際を絶ち、陰陰滅滅と一人自室に閉じ込もっていた。彼は、如何なる代償を支払っても、ソロヴィヨーフに関する自作に陽の目を見させたかった。彼に残された唯一確実な方法は、国内最高の権力者である共産党中央委員会書記長アンドローポフに助けを願い出ることであった。そこで何が起こったのか、詳細は何一つ明らかではないが、結果だけを重視して振り返るなら、アンドローポフは賞賛されてしかるべきであろう。何故なら彼はローセフの訴えを聞き入れ、印刷出版の指令を発したのであるから。こうして本は出版された。確かに、印刷された部数の全てがソ連僻遠の各地に発送されてしまったために、大きな都市では入手不可能ではあったが、とにもかくにも出版が大勝利であったことに疑問の余地はない。本は図書館で借りることもできたし、やがては地方からトランクやリュックに積みられて続々とモスクワに持ち込まれることになったのであるから。ソロヴィヨーフはこの時初めて、ロシアにおける公的な復権の第一歩を踏み出したのである。

晩年のローセフは、名誉と栄光に包まれている。彼の著作は学術研究誌のみならず、発行部数の多い新聞雑誌にも掲載され始める。彼のために様々な記念式典なども開催されるのだが、何故かついにアカデミー会員に選出されることはなかった。アカデミー会員の哲学者たちの誰もが、専門領域におけるローセ

ローセフ・アレクセイ・フョードロヴィチ (V. ジダーノフ・鈴木淳一)

フと自らの学識程度の差を意識し、多少なりとも恐れを抱かざるを得なかったにも拘らず、ソ連アカデミーは彼を無視し去ったのである。それはともかく、この時期世界的な賞を授与された彼は、記録映画の対象にまでなっている。彼にはまた、その主著とも言うべき8巻に及ぶ大作『古代美学史』に対して、ソ連でレーニン賞に次ぐ賞である国家賞が授与されたばかりか、日本でも稲森財団から同労作に対し京都賞が授与される筈であったが、死が残酷にもその授賞を阻む結果に終わってしまった。

1988年5月24日、ローセフはこの世を後にした。それは、彼が最も敬愛する聖人、スラヴ文字の創造者であり、学者の庇護者であるキリールとメトディウス兄弟の日であった。アルバート街の自宅での、多くの弟子、友人、秘書、そして今はローセフの名前の不滅化を生き甲斐に必死の活動を続けている妻アザ・アリベコヴナに見守られての、静かな死であった。遺体はワガニコヴォ墓地に埋葬された。そこは、2世紀にわたってダーリ、エセーニン、ヴィソツキーを始めとして、作家、芸人、学者たちが埋葬されてきた墓地である。5月24日と9月23日の年2回、墓地には親類縁者が集い、パニヒダ（死者追悼の祈り）に耳を傾け、「永遠の追憶」を唱和するのが常となっている。この偉大なロシアの哲学者の墓所を、これまでも世界各国の多くの学者・教師が参詣しているが、日本からも、彼の研究が進み、彼の全貌が明らかにされるにつれて、これまで以上に多くの人々が参拝に訪れるようになるであろう。

*注

ここに1931年12月12日付けの「プラーヴダ」「イズヴェスチヤ」両紙に発表されたゴリキーの論文の一節を紹介しておこう。『自然との闘いについて (О борьбе с природой)』と題されたこの論文では、社会主義体制という進歩の結実を理解できない時代遅れのブルジョア思想家としてローセフが批判の標的とされているが、白海沿岸に流刑されたローセフは、シベリアのアルタイ地方の収容所の妻に宛てた第2信(1931年12月31日付け)中で、追伸としてこの論文の一節を引用している。ローセフは「追伸。1931年12月12日付け〈プラーヴダ〉からの抜粋を添付する。とくと御覧

あれ！同じ論文が同日付けの〈イズヴェスチヤ〉にも掲載されたんだ」とだけ書いて、コメントは一字一句たりとも施していない。境遇がコメントを許さなかったのだとしても、「とくと御覧あれ！」というフレーズは、苦々しくも半ば呆れ返ったローセフの顔を思い起こさせずにはいない。

M. ゴーリキー

自然との闘いについて

ブルジョア「思想家」たちの中には破廉恥極まりない偽善者の一団がある。連中のすることと言えば、文化史におけるキリスト教の偉大な功績を云々する著作をものすることであるが、その際彼らは、キリスト教教会の凄まじい狂信性やあらゆる異教徒に対する憎悪の中断なき扇動、その無数の大審問官たちによるサディズムのことを失念しているし、「宗教」戦争がもたらした数限りない恐怖のことも、教会が奴隷制度と農奴制とを神聖化したことも忘却しているのである。地上におけるキリストの代理人たち、教会の守護者たち、主教たち、宗教的哲学者たちは、現代においても依然として、かつていつでもそうであり、とりわけキリスト教が国教化されて以来そうだった「理性の抑圧者」、人間嫌いのままなのである。哲学の教授ローセフの非合法的パンフレット『神話の弁証法補遺（Дополнение к диалектике мифа）』の原稿のコピーには、かつて勤労民衆を裏切り、将来再び裏切ろうと身構えている政治好きの亡命者たちの出版物に連日発表されているものと寸分違わぬ主張が述べられている。哲学者ローセフは、ソ連の階級的敵たちでさえもロシア労働大衆の文化的復活の諸事実を認めていることを考慮することなしに、「ロシアは、民衆が正教徒であることを止めてしまった瞬間に、死滅してしまった。ロシア民衆の救済は〈聖なるルーシ〉という形でしか考えられない」と書いている。だが、ローセフの考えでは、ロシアの民衆とは一体全体何なのか？ローセフはその特徴を、「労働者、及び農民は醜悪で、生来的にも意識においても奴隷であり、概ね退屈で、卑屈で、愚鈍である。彼らに固有の属性は、あらゆる精神的なもの、天才

的なものへの妬み、卑猥な言葉使い、居酒屋、そして自らの無学と無為に対するシニックな自己満足である」と規定している。

いやはや、まあなんとも実に素晴らしき民衆である！これでは、もしも教授が少しでもまともな人間ならば、彼には当然、彼によってかくも過酷にこきおろされた素材から「聖なるルーシ」を作り上げることなど到底不可能であることが分かるであろうし、分かるどころか首を吊りたくもなってしまうだろう。「精神的なものへの妬み」を背徳とみなしうるのはただ一人、白痴だけである。しかし、この教授は明らかに無分別であり、その知識不足は疑いようがないのであって、もしも彼の途方ない妄言に誰かがショックを感じるとしたら、それは狂っているばかりか盲でもある人間の与えるショックなのだ。勿論、教授一人がそうした人間なのではない。恐らく彼は、憎悪のために精神が損なわれ、憎悪のために盲いてしまった彼と同類の人々の間で舌を動かしてきたのである。だが、そうした取るに値しない、名誉心の強い、腐敗した人々に、若き主人たる労働者階級が自らの環境から何千という社会主義社会の知的で才能豊かな建設者を輩出しつつ、信じられないほどの成功を収めている国において、新しい個人・個性が創られつつある国において、一体何ができようか？そうした国においては、死に遅れた人々、とはいえもはや腐敗し、大気を腐臭で汚染している人々に、すべきことなどないのである。

IV. ローセフ —— その人間性

ローセフは、当然のことながら、頭抜けて非凡な人間であった。一度でも彼に接したことがある人だったら誰でも、そのことを理解せずにはいられなかった。誰もが、同僚であれ、学生であれ、隣人であれ、タクシーの運転手であれ（彼は講義にも、教授会、学会にもタクシーで通っていた）、誰もが彼に対しては、畏怖の念にも似た敬愛の情を持って接しざるを得なかった。誰もが皆、何故だかすぐさま、自分と相對しているのは何か特別な、突如地上に降臨した神の如き偉大な人間であるかのように感じ出し、そこから神々しい光が発散されてでもいるかのような幻覚めいた気分襲われるが常であった。彼はいつでも皆の関心の的であった。例えば、さる映画祭で有名なイタリアの映画監督の登場を待っていた観客が、タクシーから降り立つローセフを目にするや、映画や監督のことなどどこ吹く風、一斉に彼をめぐめて突進して行った、という話は、今でもローセフを知る人々の間では語り継がれている。

ローセフの人生の幼少期から壮年にかけての詳細は未だ明らかにされていないが、70年代から80年代にかけての彼の風貌は、もはや押しも押されぬ神々しいまでに偉大な長老のようであった。長身で肩幅は広く、がっちりとした体格。穏やかで自信に満ちた物腰。一挙手一投足に滲み出る静かな威厳。時折姿を見せる優しく、皮肉の僅かに混じった微笑。片時も頭を離れない教授帽（自室でも、教室でも、食事やお茶の時間でさえも、彼は、ソ連の教授連は誰一人被ることのなかったと思われるこの帽子を身につけていた）。時代遅れも甚だしい眼鏡。冬に愛用したアストラカン皮の襟のついた大きく重い外套。春と秋にお決まりの、軽くエレガントな、20世紀初頭には最新のモードであった、いわゆる「パリ風」コートと巨大なカフカス式鳥打帽。この鳥打帽は、ローセフ宅では「キスのような」と形容されていたが、それは、この帽子が見た目の大きさにも拘らず、ローセフ自身の言葉を借りれば、「幼児のキスのように軽い」からであった。彼のような非凡の中の非凡な人間の登場が、非凡が

許されないソ連の日常世界において瞬く間に一大事件となって行ったのも、当然のことであった。ローセフは誰と話をするにも「君 (ты)」で通したが、この常識外れの作法がどのような考えに基づいてのものかはさておき、彼の超俗性を語っているかのようであった。もっとも、自分より年上の人には「あなた (вы)」を用いることにしていたようではあるが、この時期の彼の年齢を考慮するなら (80~95 歳)、彼には「вы」で話しかける人など殆ど皆無に等しかったではあろうけれど。

ローセフの性格の基本的特徴と言え、それは恐らく、タイタンの一途さ、自分の理想と信念をどこまでも貫こうとする執念であろう。一方、日常生活における彼は、朴訥素朴な、こだわりのない、謙虚な人であった。彼が師と仰ぎ、敬愛するソロヴィヨーフ同様、彼自身もどこか子供を思わせるところがあり、つまらないことでふてくされもし、だだをこねたり、ふざけ騒ぎ、いたずらをする事ができるかと思えば、チョコレートやケーキといった甘いものには目がないのだった。彼はまた、人を信じ易く、誠実で善良であり、友人や知人が困っているのを黙過することなど決してできず、どんな時にも借金を頼まれて断ることはなく、とりわけ経済的に逼迫している若い研究者たちには黙って金子を分け与えたのであった。

ローセフの一生はただひたすらに学問研究に捧げられたのであって、若者たちと一緒にドライブするとか、店頭行列に並ぶとか、自宅の修理に精を出すとか、ラジオのサッカー放送に耳を傾けるとか、中庭で隣人たちとドミノに興じるといった、ソ連市民にお馴染みの日常風景の中にいる彼の姿など、夢にすら思い浮かべることは不可能である。従って、少なくとも 70~80 年代の彼の生活の毎日は、昨日と今日、今日と明日が区別できない程に、殆ど変化のないものだった。ローセフは朝は遅く、11 時頃に起床し、教授帽を被ると、その時刻めがけてやってくる秘書と朝食をとる (秘書には大学生もいれば、大学院生、少壮研究者もいた)。そして 12 時になると、何があろうとなかろうと、とにかく机に向かう。秘書が読んだ本のレジюмеを提出し、必要な箇所をロシア語、あるいは英語、フランス語、ラテン語で朗読すると、ローセフはそれを聞

きながら、しばし考えを巡らし、それから凄じい速さで口述を開始する。時計が2時を告げると、東の間の休憩を取り、林檎を食べるか、紅茶を一杯飲む。この小休止が終わるとまた5時まで仕事をする。その後、数点の古代彫刻と多くの古文献の立ち並ぶ書齋に閉じ込められ、半暗闇の中で思索に耽る。7時には

アルバート街の自宅周辺を散歩し、散歩から帰ると食事が始まる。食事には殆どいつでも決まって客が同席したが、その客は学生たちであることも、作家や有名な学者であることもあった。それはモスクワの伝統的な接客作法を一から十まで遵守した、即ち厚いもてなしの食事であった。

食事中のローセフは、自分からは口を開くことなく、客たちの会話に耳を傾けているのが常だったが、会話が面白くもない日常的なテーマの、退屈で幼稚なものだったりすると、テーブルの上に置いた手の指を世話しなく動かし始めるのだった。客たちは言いたいことを言ってしまうと、モスクワの伝説的教授の話は拝聴しようと、どうにかしてローセフを話に巻き込もうとした。時にはローセフ自身が進んで客たちの誘いに乗り、次々と質問に答え、積極的に話に参加することもあった。そんな時には、食事もすんで、10時か11時頃に、お茶を飲みながら、自分の過去や、哲学、古代学、様々な書物、音楽、学者仲間などのことを、滔滔と語って止まないだった。それでも彼は、一度たりとも自分が経験した逮捕、流刑、収容所のことを口にするとはなかったし、過去を呪う言葉を発したこともなかった。ただ時折、現代の編集者や出版者を、とは即ち彼らを陰で支配する難攻不落の検閲制度を激しく罵り、削除のメスを入れられた自著のことを嘆くのだった。興味深いのは、こうした会話の中でローセフがしばしば、あたかも時間の観念を失ってしまったかのように見えることだった。時にはスターリン時代が未だ存続し続けているかのように、必要以上に慎重な態度をとり、忠実そのもののソ連市民であるかのように見せかけようとするかと思えば、また時にはそのまったく逆で、レーニン主義とソ連体制の仮借なき摘発者ともなるのであった。しかしそれは、彼が何が何時起こったかを忘れてしまったからではなかった。彼は95歳の死の瞬間まで明晰な記憶力を保持しており、事件の日時、人の名前、諸外国語は勿論、教え子や知人の論

ローセフ・アレクセイ・フョードロヴィチ (V.ジダーノフ・鈴木淳一)

文審査の日付さえも覚えていたぐらいなのである。確かに、高齢者の記憶の混濁ということは言えそうだし、また「一寸先は闇」「この世に起こり得ないことはない」という、長期にわたる迫害と波乱万丈の生涯によって刻み込まれた強迫観念の仕業とも言えそうであるが、あるいは彼の時間観に由来するものなのかも知れない。彼自身に問うすべのない今となつては、ここでは軽々しい断定は避けておくことにしよう。

さらに指摘しておくべきは、こうした夜の会話においてローセフは、機知に富んだパラドキシカルな話題を非常に高く評価し、含蓄の深いアネクドートや地口、冗談を好んだということである。とりわけ彼が好きだったのは、自分の姿勢や評価を表現しようとする時、それを何らかの詩作品からの抜粋によって代行させることである。例えば、彼が彼自身の長年にわたる学究生活をどのように評価しているのかとの問に対し、彼はその返答として、次のようなレールモントフの詩の一節を引用したのだった。

あなたは知りたいとおっしゃるのか、自由な身の僕が
何をしていたのかを？僕は生きたのだ……

(『ムツィリ』第8節)

つまりローセフは、自分の学究生活の全てに対する評価を、「僕は生きたのだ」という短い、とはいえ含蓄に富んだ詩の一行で表現したのである。

客たちが去り、12時頃になると、ローセフはラジオにスイッチを入れる。当時にあつては唯一であつたこの非公式情報供給源を通じて、ドイツやイギリスの放送に耳を傾けるためだった。放送を聞き終わると、再び仕事に取りかかり、夜を徹して、翌日秘書に口述筆記してもらふべき新しい本や論文、講演の構想を練るのであつた。こうして明け方の5時前後になってやっと、ローセフは多量の睡眠薬の助けを借りて眠りに就くのである。

ローセフの人となり語るに際して、是非とも触れておかなければならないのは、彼の類稀なるその雄弁の才である。彼は、教育者・教師としての自分の

使命は、聴講者を引きつけ、彼らの心の中に認識する喜びに溢れた生きた思想、生きた思考力を呼び覚ますことだ、と一再ならず語っている。果たして彼の講義、講演を聴く人々は、いつでも誰もが息を潜めて、一言も聴き漏らすまいとするのが常だった。彼が語っている最中に、それが誰にしる、居眠りをしたり、私語をしたり、私用に耽ったりすることなど考えられないことであった。彼は壇上から、大きなはっきりとした声で、情熱的であると同時に論理的に滔滔と語ったが、それでも皆が涙が出る程笑い転げるような、常人の想像を絶した例をいくつか引用することも決して忘れはしなかった(注)。

最後にローセフの好みの問題について数言しておこう。彼の好みは日本人には若干奇妙なものに見えるかもしれないが、その奇妙さを理解するためには、彼が大変動を伴った悲劇的時代の反抗的哲学者の一人であることを想起しなければならない。彼、あるいは彼らにも、一般にどこでも受け入れられていた古典的な文化的価値のいくつかを、時にはどうしても受け入れ難いと感じてしまう、いわば彼らなりの時代的制約というものがあったからである。

ローセフの好みのうち、嫌いなものから始めるなら、何よりも真っ先に挙げるべきは、実証主義、合理主義、そして俗流唯物論であろう。従って、当然のことながら、いわゆる啓蒙主義者たちに対しては、とりわけフランスの啓蒙主義者たちに対しては、彼の姿勢は少なからず否定的である。例えば、彼はヴォルテールを、庇護者であるプロシャ王フリードリヒ2世をペテンにかけた「ペテン師」「山師」と呼んでいる。もっとも、ヴォルテールの書簡については、革命前夜の社会の精神状態に関する瞠目すべき証拠書類として、正当な評価を下している。同じことはルソーについても言えて、啓蒙主義者としてのルソーは愛し切れなかったが、いくつかの作品に対しては非常に高い評価を下している。ローセフのいう啓蒙主義者の範疇は実に広く、ルネッサンス活動家たちや、スペンサー、ダーウィン、テーヌといった実証主義者(ただし、テーヌのフランス革命を扱った『現代フランスの起源』は愛読していた)、さらには、ラヂーシチェフ、ベリンスキー、チェルヌィシエフスキーといったロシア革命民主主義者の第1世代から、その後継者たるロシアのマルキスト、ポリシェ

ヴィキまでがそこにくくり入れられていた。ローゼフにとって、近代の啓蒙主義者、あるいは思想家たちのしたこととは、物質的世界の一義性、優越性を主張し、観念論を排斥することによって、大多数の人々を理想と信仰を持たない倫理的な不具者に変質させ、人間の価値や人生の意味に関する彼らの知識と理解を合理的に単純素朴化してしまっただけのことであるように思えたのである。真の精神性の喪失とそれに伴う肉体的なものや悪魔的なものとの結託が、ルネッサンスの芸術家たちの作品に既に姿を見せている、とローゼフは考えていた。彼はこう書いている。「『モナ・リザ』もまた、いかがわしい肖像画である。第一に、その視線は淫らそのものだし、表情も微笑んでいるというよりは、どうにか歯を剥き出そうとしているかのようで、そこには何か恐ろしげなものが潜んでいるし、前面に押し出されているのは不身持というか、最初の男を快楽へと誘う淫蕩性といったものであって、そこには如何なる精神性も存在しないのである。俗物には如何に神秘的に見えようと、いずれそこには一片の神秘性もありはしないのだ。正しくこれこそが、ルネッサンスの正体に他ならないのだ」(前掲、「原理」、137～138頁)。

そして、ラヂーシチェフからベリンスキー、チェルヌィシエフスキーを通過し、レーニンへと連綿と引き継がれた唯物論と啓蒙主義こそ、ローゼフの考えでは、ロシアを革命へと駆り立て、さらには実証主義と合理主義の道を驀進するソ連社会主義体制を未来のカタストロフィーへと駆り立てずにはおかない張本人なのである。従って、マルクス主義者や共産主義者には、いわんや革命活動家などには、何がどうあっても絶対に共感を抱くことはできなかった。スターリンに対する彼の姿勢は言わずもがなであるが、レーニンにしたところで、たとえ公式的には悪くは言っていないにしても、心の中では憎んでいたと考えて差し支えない。彼はレーニンにまつわるアネクドートが非常に好きで、中でもとりわけ好んだのは次のようなアネクドートだったのだから——「あるユダヤ人が『レーニン死すとも、彼の事業は未永く生き長らえるであろう』というスローガンを読み上げるや否や、『いやはや、なんてこったい！あんなに素晴らしい人だったレーニンが死んでしまうなんて……本当に残念なこった！だけ

ど彼の事業の方がおっちんでくれて、彼は末永く生き長らえてくれたらもっとよかったのに』と言って、おいおいと泣き始めた」。

外国の作家について言えば、ロシアで知らぬ者としていないほどに有名なバルザック、モーパッサン、ゾラを、ローセフはさして評価していなかった。また、バーナード・ショウとマーク・トウェインに対しては軽蔑的で、彼らを「ひょうきん者」と呼んでいた。ソ連の現代文学は殆ど彼の関心外にあったが、それでもショーロホフは好んで読んだし、トリーフォノフ、ソロウヒン、ラスプーチンの3人に関しては肯定的であった。ソルジェニーツィンは、勿論、熟読吟味に耐え得る作家であった。

一方それに対して、ローセフが無条件の好感を示したのは、弁証法観念論者、非合理主義者、デカダン主義者であり、そして特に象徴主義者たちであった。中でも象徴主義者のヴァチスラフ・イワノフには、心酔し切っていた。哲学の分野において彼が敬愛し、師事したのは、先ずはプラトンとソロヴィヨーフであり、続いてヘーゲル、シェリング、ベルクソン、フッサールであった。また、ドイツロマン主義にも傾倒し、ノヴァーリスとヘルダーリンを愛読したが、「私の恋人は万象の簡約（アブレビাতゥール）であり、万象は私の恋人の拡大（エロンガトゥール）である」（『断片』77節、〈ノヴァーリス全集〉、第2巻、牧神社、32頁）というノヴァーリスのアフォリズムは、特に彼のお気に入りであった。

ロシアの古典文学への関心と敬愛は、ごく一般的である。彼自身の言葉を借りれば、「プシキンとレーンモントフは、他のみんなが好きというほど好きな訳ではない。しかし、それは古典である。ロシアの古典である以上、私にはそれを知らないでいることも、好きにならずにいることもできない。私は、勿論、ロシアの古典の価値を認め、高く評価している。しかし、私は他の誰にも増して古典主義者ではないのだ」（ローセフ、『弁証法への情熱』、51頁）ということになる。象徴派となるとまた話は別で、B. イワノフ、A. ベールイ、K. バリーモントに到っては、ローセフは殆ど神格化していたと言ってよい。古典の中ではゴゴリとチュッチェフを熱愛したが、それは、ローセフの考えで

は、彼らが象徴派に近い存在であったからに他ならない。

トルストイについてはローセフは全く否定的だった。トルストイの作品から匂い立つ啓蒙的合理主義が我慢ならなかったのだろう。ある談話において彼はこう語っている——「ドストエフスキーはインテリではない。ヴラヂーミル・ソロヴィヨーフもインテリではない。私の物の見方もインテリ的ではない。インテリゲンツィヤとはそもそも何か？それはリベラルなブルジョアの進歩思想じゃないかね？私はそんなものには我慢ならない。〈中略〉トルストイはインテリでしかもロシアの古典作家だ。だからトルストイは当然私には無縁なのだ。私に食べることができるかね、え、レフ・トルストイの推奨する米で作ったハンバーグなんて？米ハンバーグの神秘なんて一体何になるんだね？」(同前掲書、47頁)。

・チェーホフへの接し方は少し複雑である。ローセフは自著の中で何度もチェーホフの作品から面白い例を引き合いに出しているにも拘らず、同時にチェーホフに強い怒りを感じていたからである。というのも、ローセフが自分の人生の最良の時期を、古代への興味やラテン語、ギリシャ語の素養をも含めた基本的な精神の方向性を与えてくれたギムナジウム時代とみなしていたのに対し、チェーホフは短編『箱に入った男』の中でギムナジウムを散々こきおろすとともに、更にご丁寧なことに、唾棄すべきギリシャ語教師までそこに登場させているからである。

ローセフが絶賛して止まず、誰よりも高く評価していたのはドストエフスキーである。彼にとってドストエフスキーは、西欧文明の来るべき危機の偉大な予言者であった。ワーグナーやスクリャービンの音楽を愛したのも、恐らく同じ理由によるものだろう。ローセフは彼らの音楽に迫りくる大破局の予感的調べを聞き取っていたに違いない。ローセフが言うには、「ワーグナーは作曲家の中で一番最初に（作家の中ではドストエフスキーが一番最初に）西欧の人間のカタストロフィーを表現したのです。人間が定められた秩序に従って起きては、食べ、飲み、そして寝るという決定的に非精神的な生活のカタストロフィーを」(前掲、「原理」、144頁)。

*注

ここに、短いが、ローゼフのユーモアをよく示していると思われる談話の一部(1972年8月15日付け)を紹介しておこう。

ある神学校生が試験に臨んだ。問題は奇跡についてだった。試験官の中にさる主教がいた。主教が学生に質問した。

—— 鐘つきが鐘楼から落ちたが、助かった。これは奇跡か？

—— 主教様、それは好運です。

—— では、もしも2回目もそうだったら？

—— それは偶然です！

—— では、10回立て続けにそうだったとしたら？

—— それは習慣です！

V. ローセフ —— その思想

〈1〉 ローセフはどんな思想家・哲学者か？

ソ連の百科事典や便覧の類は、ローセフを観念論を克服してマルキストになった哲学者・思想家として扱うのが通例であったが、最近ではロシア正教哲学者として位置づけるのが一般的である。H. ロスキーは自著『ロシア哲学史』において、ローセフを直感主義哲学者の一人に数え上げている。また、よく「銀の時代」最後の哲学者とか、「神話、数、シンボル」の哲学者とも呼ばれるし、「純ロシア的観念論の領袖」という呼び名を耳にすることもある。さらには「ロシアの弁証法学者」、「非合理主義者」、「弁証法的現象学」の哲学者というレッテルを貼付することもできるだろう。ある研究者は、その哲学的な多面性を念頭において、こう言っている——「ローセフは、こうして多義的で多面的な人物として姿を現すのである」(前掲、「原理」、5頁)。

こうした様々な呼称はどれも皆、それなりの真実を伝えてはいるものの、どれ一つ必要十分な定義とみなすことはできない。ローセフは、心底からマルキストであったことなど瞬時たりともなかったことは勿論であるが、何らかのマルクス主義的な命題が密かに根を下ろしても不思議がないくらい長期にわたってソ連の正統派哲学者として振る舞わざるを得なかったこともまた真実なのである。ローセフをロシア正教思想家と呼ぶのも不当ではあるまい。彼は正教会に属していたし、たとえソ連体制ゆえにその信仰を公言することはなく、またソ連公認の教会には何等の共感を抱いてはいなかったにせよ、彼は終生変わることなく信心深い人間だったからである。彼自身の言葉を借りるなら、「私の教会は心の奥深く潜り込んでしまった」(前掲、「原理」、135頁)のである。しかし、彼の哲学的探求を支える基盤の一部を宗教的原理が担っているのは疑い得ないにしても、正教哲学者という定義は余りに狭隘であろう。何故なら彼は、師のソロヴィョーフ同様、カトリックを始め、種々の宗教、神学体系に多大の関心を示し、関心を示すのみならず、それぞれから某の要素を積極的に吸

収して行ったからである。では、より広範なキリスト教思想家という定義はどうかと言えば、ローゼフの関心の中心が古代であり、ギリシャの思想に強く引かれていたことを想起するなら、これまた全面的と言うには程遠い定義であろう。ロスキーにならって、ローゼフを直感主義者とするのも間違っていない。彼はベルグソンの信奉者であったし、ローゼフによれば、世界認識は「知的直感」を通じて初めてなされるものだからである。だが同時に忘れてならないのは、ローゼフにとって、この知的直感の本質理解の一手段に過ぎないということである。ローゼフにはさらに、「銀の時代」最後の思想家・哲学者と呼ばれるべき権利も持っている。ソロヴィヨーフに始まり、フランク、ロスキーに終わるロシア・ルネッサンス哲学の基本方針を全て継承し、発展させることができる立場に彼はあったのだし、彼以降にそうした哲学者は誰一人見当たらないからである。しかし、鳥瞰の視点をもっと高めて見るなら、ローゼフの思想の源流は、ソロヴィヨーフを越えて19世紀前半の正教思想家であるキレエフスキー、ホミャコーフにまで遡ることができようし、その普遍主義、全地球規模の宇宙発生論的な哲学姿勢は、「銀の時代」を遥かに離れて屹立しているように思われる。

以上列挙してきた定義につけ加えておくべきは、「観念論者」というレッテルであろう。但し、その際断っておかなければならないのは、ローゼフにとって観念的なものとは物質的なものの原動力であったということである。「実際のコルホーズは悲惨な状態にあり、荒涼として破綻に瀕している。田畑は草が伸び放題で、家畜は餓死寸前である。だが、コルホーズのイデーは依然生きて勝利を収めつつあるのであり、イデーが活着している間は、コルホーズも活着しているのであり、また生き続けることになるのである」といつか彼が語ったように、イデーが世界を意味づけるのであり、イデーなくしては世界は立ち行かないのである。ローゼフにあっては、観念と物質は表裏一体なのである。

結局の所、思想家としてのローゼフにはどのような定義づけがふさわしいのであろうか？これは難題である。第一に、余りに単純な理由ではあるが、筆者も含めた現代の読者の浅学非才という事実を挙げることができよう。そして、

何にもまして大きな障害は、ローゼフには綻び一つない首尾一貫した体系化への意志が強く感じられる一方、「構造こそ全て」というその意志の貫徹を個々の著作では読み取ることができるものの、そうした個々の著作に見られる諸体系を収斂すべき普遍的大体系が、どうしても捕らえられないという点にあるように思われる。あるいはあるのかも知れない。しかし、浅薄のそしりを恐れずに印象を述べさせてもらうなら、ローゼフは存在と思惟に関する包括的な一大体系の樹立を、時間的に自ら断念したか、あるいは死によって断念させられたか、いずれにしてもなし得なかったとしか考えられない。それでも、次々と間断なく発表される論文が彼の思想の展開を反映していることは確かなのであり、美学、歴史、数学、音楽、言語学と多岐にわたる彼の著作から、マルクス主義的引用を全て捨象し、あらゆるイソップ的言辞やほのめかし、引喩を正しく解説しながら、彼の思想的歩みを跡付け、彼の目指した包括的体系の輪郭を明らかにする仕事は、どんなに複雑で困難であれ、現代の研究者に残された、是が非でも一日でも早くこなされるべき課題であろう。

〈2〉 ローゼフの思想・哲学の基本的特徴。

哲学を専門としない我々には、残念ながらローゼフの思想・哲学をうまくモデル化して紹介するだけの力量はない。従ってここでは、彼の思想・哲学の変幻自在とも思える他面性とその普遍主義とを幾ばくかなりとも説明できるような、基本中の基本といった特徴を指摘するにとどめよう。

その時、真っ先に言及すべき、恐らくは最も重要な事柄は、若きローゼフが自然と人間存在に関するグローバルなモデルを構築しようと思いついた原因、目的とは一体何であったか、ということである。

人は、自らが属す世界が不完全とあると感じるか、世界が滅亡に瀕しているように見える時、何よりも先ずこの本質を一挙に理解しようとするものである。若きローゼフがロシア帝国の崩壊と、それに続く革命、内戦、飢餓、戦闘的無神論の台頭、教えを受けた教師・学者たちの国外追放を、どのように経験し、どう内面化していったのか、それを知るよすがはない。もしかしたら、勿

論、万に一つの可能性でしかないが、革命の火の手に誘われたこともあったろうか？いずれにしても、帝国の崩壊しゆく光景と未来への不安な思いが、彼の心の中に大きな問いかけを引き起こしたであろうことは想像に難くない。ロシアの文明の過去における試みの意味とは一体何だったのか？革命、戦争、逮捕、追放、迫害といった社会的災禍からの救済はありうるか？即ち、もっと正確に言えば、こうした災禍は全て世界秩序の枠内での出来事なのか、それともロシアの、あるいは世界全体の終末なのか？という問いかけである。これは勿論仮説に過ぎない。だが、有力な仮説ではあり、ここではこの仮説に従って、ローゼフには人類史を総決算的に意味づけようとする内的必然性があったのだとして、先行する時代の意味を徹底的に突き詰め、人類の歴史を総合的に意味づけようとするこの志向を、思想家・哲学者としての彼の最大の特質として指摘しておこう。

ローゼフの最初の妻ワレンチーナ・ミハイロヴナはこう言っている——「そうした哲学者はいつでも偉大な世紀の終わりには、何世紀にもわたる思想活動を体系化し、滅び行く文化の財産目録を作るために、そしてその目録をやっと建設され始めたばかりの次代の文化に伝えるために、必ず現れたものでした。であればこそ、ローゼフはかねてから古代の新プラトン主義やニコライ・クウザンスキー、ドイツ観念論を愛したきたのであり、その愛情は、彼の論敵たちによって常に彼の神秘主義として片づけられてきましたが、本質的にはその半分は体系への、目録への、様式への、総決算への愛情でもあったのです。そのこと理解するには、彼の主要著書の目次を見るだけで十分です。そこでは到る所、事細かなデテールに支えられた、広大この上ない体系が前面に押し出されているのです。ローゼフは哲学史においてさえもしばしば総括化だけを目指していたのです」（前掲、「原理」、114頁）。

彼が哲学史において目指していたのは、古代から現代に到るロシアと西欧の思想の基本的哲学概念を全てまとめ上げ（残念ながら東洋思想は彼の眼中には入っていなかった）、それをモデル化することであった（「モデル」と「モデル化する」が彼の愛用語であったのも偶然ではない）。こうしたモデル化は、古

代、中世、近代といった概念の理解に役立ったばかりか、モデル化されたもののあるものは自身の思想の更なる展開の出発点として、挺子として利用することもできたのであった。ローゼフの哲学的探求の挺子の役目を果たしているのは、プラトンと新プラトン主義者たちの観念論、中世ヨーロッパの哲学者たちの主知的な神秘主義、ヘーゲルの弁証法、ソロヴィヨフの全的統一論、ベルグソンの直感主義、シェリングの超越的観念論、アインシュタインの相対性理論、ローレンツの電子論、ドストエフスキーの主人公たちの精神的変貌、ニーチェのツァラトゥストラの超人的孤独、フッサールの現象学、等々である。ローゼフの哲学的探求の土台を流れる、多岐にわたるこれらの源流を貫徹し、束ねているのは何だろうか？観念論であろうか、神秘主義であろうか、非合理主義であろうか、それとも反逆の精神であろうか？それら全てと答える以外に手だてはなさそうであるが、どうしてもと言うなら、弁証法とするのが妥当な所であろう。弁証法こそが、彼に対する、観念論者を始めとした一定の主義者としての名付を、そうした狭隘な定義の応用を、妨げているのだからである。彼においては観念的なものは物質的なものと、神的なものは自然哲学的なものと分ち難く結びついており、その非合理主義も、分析される存在の極めて入念に考え抜かれた目録作成の中に編み込まれているのである。ローゼフにとって万事にわたって最も重要なのは、「生成」というカテゴリーなのである。「ローゼフは数学的な分野や音楽的な分野においても、弁証法という強力な基盤に立って自らの論理を構築しているだけでなく、同じ論理構成を認識論や文化学分野にまでにまで持ち込んでいるのである〈略〉。20世紀初頭の数10年間のローゼフの研究に顕著な特徴である弁証法への情熱は、今世紀末に至るまで健在であり、その結果ローゼフの名前は、過つことなく、そして常に「ロシアの弁証法論者」という最も包括的な定義と結び付けられている」（前掲、「原理」、6頁）。では、ローゼフは全ての哲学を総括したその果てに、結論としてどのような論を展開して見せようとしたのであろうか？

〈3〉存在に関する普遍的な哲学的概念創出の試み。

過去の哲学的モデルを活用するにせよ、廃棄するにせよ、ローゼフはそれらを歴史的に完結した現象として扱うのが常であった。彼にはあたかも、人類史における巨大な期間の終焉が予感されているかのようであった。とはいえ、それはソロヴィヨーフにおけるような終末論的な予感では全くなかった。そうではなくて、ソ連体制も、ロシア帝国も、近代も、この世の全ては所詮コスモスの巨大な渦巻の中の一瞬のあぶくに過ぎないという認識に由来する予感であった。ここで重要なのは、彼にとって世界存在とは、唯物論者たちが好んで描きたがるような、生命を持たない冷たい何かではないということである。この点について彼はこう言っている——「この恐ろしき無限の中では、無数の銀河が、数限りない無名の惑星が、孤独と空無の中に打ち捨てられているかのように見えるし、その無限たるや、全天体の機械的な束縛にあって、何か死臭めいた臭いを放っているんだ。何ともはや、君の信じている世界空間構造ときたらとんでもない代物だね！それはもう構造なんて代物どころか、墓場そのものまでには行かなくても、一種の牢獄だね。でもね、そうした構造はやっと17世紀にニュートンによって作られた神話以上のものでもなければ、以下のものでもないんだ。しかもその神話ときたら、せいぜい2世紀を生きて抜いてきただけに過ぎないんだからね。今では、この神話を信奉しているのは教科書だけで、しかもだ、全部の教科書が信奉しているわけでもないんだからね」（『弁証法への情熱』、24頁）。もしも、アインシュタインやローレンツの発見に従って、空間とは均一ではなく、どんな歪みも許容するものであるとしたら、光速で運動する物体が殆ど無に還元されてしまうのだとすれば、ニュートンの法則とは何だろうか、とローゼフは問うているのである。ローゼフにとって存在とはなべて、神的原理を、あらゆる存在がそのおかげで意味の地平に浮上できる神的原理を内抱した、従って奇跡の可能性が胎動する、エネルギーで、魂を持った、有機的な何かなのである。ローゼフはまた、神的原理とともに予定性というカテゴリーも導入している。あらゆる存在は各々の予定性に従って生成を重ねるという考えであるが、この予定性は様々な形での実現可能性を秘め

ており、その限りにおいてこの予定の生成過程には、運命、あるいは宿命という言葉で表現されるのが一般的な予め決定された目的、結果は無縁である。

ところで、これまで述べてきた事柄の中には、一見して分かることであるが、いわゆるコペルニクス的転回を促すような発見は何一つない。しかし、ローゼフの独自性は、上述したような抽象的公理の表明にあるのではなく、そうした公理の実際的な運用にこそあるのである。つまり、哲学と言えれば世界の成り立ちに関する理論的解説を提供する抽象的な学問という常套の枠を打ち破って、ローゼフはありとあらゆる哲学的モデルと公理とを駆使して、存在の本質というものの最高度に普遍的な体系を、どんなデテールをも細大漏らさず網羅した上で、打ち立てようと試みたのである。そして、彼はこの超人的な信じ難い仕事の第一歩を踏み出すに当たって、先ずは名前、数、神話といった、人間と世界存在との精神的紐帯の中で最も重要な要素の研究に着手したのである。

『名称の哲学』の土台に据え付けられているのは、「神の名称は神それ自体であるが、神は神の名称でも、名称一般でもない」という宗教的な固有名詞学の理念である。名称はローゼフにとって、人間の個性を、生を、理解する鍵なのである。名付けられていない世界は百鬼夜行のカオスであり、名付けとは、精神性を創造し、世界を意味づけることに他ならないのである。「語」「言語」「個性」「シンボル」「神話」「神」——これらがこの著作で扱われている問題群の核心をなすキーワードであり、そこでは哲学、言語学、神智学の新解釈が提示されているのである。

『論理学の対象としての音楽』では、哲学、言語学、音楽の存在論的統合について論じられている。そこでローゼフが主張して止まないのは、「純粹に音楽的な存在というものがある」という事実である。音楽の根底には数と時間の相関関係が横たわっているが、そこでは時間は常に予定された数であって、従って音楽は一種の世界調和の表現に他ならない、というのである。

さらにこの時期最大の労作である『神話の弁証法』では、芸術、学問、政治、宗教に表出された個人的意識、並びに全人類的意識に対しての哲学的意味

付けが試みられている。ここでは神話はイデーの意味の担い手として登場し、個人のエネルギーな自己確立の基盤であり、奇跡であるとされている。学問も芸術も生それ自体も、だから、全て神話とみなされる。ある宗教的セクトや民族主義、共産主義、ファシズムといった神話のように、特定のイデーが盲目的に崇拜されしまう私的で相対的な変種の神話も勿論あるが、絶対的な神話とは、神との交信・交感の至高の形態の一つを体現するものなのである。ローセフの神話学理論は、歴史を新たな視点で見直し、歴史の隠れたメカニズムを暴き出すものであって、今世紀の始めと終わりにロシアで起きた革命の本質を理解しようとする時、大いに役立つ。歴史の歩みは、何にもまして神話的な力に支配されているからである。国家は、強力に安定した神話を有する限り、揺るぐことなく存続し続けることができる。今世紀初頭、ロシアで革命が勃発したのは、様々な原因が重なって、その「君主制、祖国、正教」といった神話が揺るぎ始め、死への道を急ぐ途上でのことであった。革命は神話的カオスの、即ち、西欧伝来の社会主義ユートピア思想、及び実証主義、合理主義と疲弊したロシアの社会意識との折衷主義的混合の所産なのであり、この混合がやがて共産主義神話へと収斂されるとともに、死に絶えたロシアはソ連として再生されて行くのである。そして、今世紀末の革命は、ソ連の共産主義神話の綻びとともに訪れたのであり、現在のロシアの混迷は神話的カオスの実態をあまねく反映していると考えて差し支えない。現代ロシアの混乱と第2次世界大戦後の日本の混乱との比較が時に取り沙汰されるが、ローセフの神話学理論に照らせば、この比較は殆ど無益と言わざるを得ない。何故なら、戦後の日本には、深刻な経済危機はあったものの、国民全体を巻き込むような神話的カオスは生じなかったと思われるからである。遅かれ早かれロシアは再び再生の一步を踏み出すであろうが、それには、如何なるものにせよ新たな神話の創出が不可欠なのであり、新生ロシアは、創出されたその神話の浸透度に比例して、地歩を固めて行くしかないのである。

ローセフは何事を研究するにしても、可能な限りの事実と資料の収集から始めるのが常であった。収集し、収集した事実と資料を、弁証法の分析原理を厳

守しながら、あらゆる角度からあらゆる照明の下で検討し、その分析し検討した結果を、簡潔であると同時に最大限の容量を持った表現の中に封じ込めようと努力した。一つ例を取れば、プラトンの哲学は「水のイデー」である、というように。つまり、実際の物質としての水は、雪にも、氷にも、蒸気にも姿を変えることができるし、化学反応による変化も可能ではあるが、水のイデーはイデーのままであることもできるのであって、プラトン哲学の非凡性とその懐の深さとを簡潔に見事に言い当てた表現となっているわけである。

ローセフという非凡な人間を凡人が紹介する都合上、同心円をぐるぐる回るような支離滅裂気味の文章になってしまったが、最後に、ローセフは何よりも「生きた思想」を高く評価し、退屈でひからびた公理ではなく、生きた思想でこそどこでも、学術的研究でも、講義でも、講演でも、どこでも満たされなければならない、と倦むことなく繰り返し語っていた事実を報告し、次章に彼自身の学問への情熱を語った短い論文を訳出し、さらにビブリオと数点の写真を付加することによって、本稿を閉じることにしよう。

〈参考文献〉

ここで、本論のⅡ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ章で使用した主な参考文献をまとめて挙げておくことにしよう。

1. Алексей Фёдорович Лосев. К 90-летию со дня рождения. Тбилиси, 1983.
2. “Вопросы философии”, 1993, №9. Материалы к 100-летию со дня рождения Лосева.
3. Ерофеев В. “Последний классический мыслитель”. Предисловие в кн: Лосев А.Ф. Страсть к диалектике. М., 1990.
4. Контекст. 1990. “Памяти Алексея Фёдоровича Лосева”, М., 1990.
5. Лосев А.Ф. Вл. Соловьёв. М., 1983.
6. Лосев А.Ф. Дерзание духа. М., 1988.
7. Лосев А.Ф. Повести. Рассказы. Письма. М., Спб., 1993.

8. “Начала”. Философско-религиозный журнал. №2, 1993. (Материалы к столетию со дня рождения Лосева)
9. Поэзия 54. 1989. “Философские беседы” (Из последних бесед с Лосевым). М., 1989.
10. Тахо-Годи А.А. “А.Ф. Лосев. Жизнь и творческая судьба”. Вступительная статья в кн: Владимир Соловьёв и его время. М., 1990
11. Тахо-Годи А.А. Гоготишвили Л.А. “А.Ф. Лосев”. Вступительная статья кн: А.Ф. Лосев. Из ранних произведений. М., 1990.
12. Тахо-Годи А.А. “Алексей Фёдорович Лосев”. Предисловие в кн: Лосев А. Ф. Бытие. Имя. Космос. М., 1993.

以上の文献の他にも、ローゼフの秘書を務めたこともあるВ.ジダーノフの個人的な思い出は勿論、1990年～91年のモスクワ滞在中にローゼフの未亡人タホ＝ゴヂを数度訪れた鈴木 of 思い出も幾分利用した。

VI. 学問における永遠の青春

この論文は初め〈Студенческий меридиан〉誌に発表され (1984年、5号)、後に《Страсть к диалектике》(M., 1990) に収められたものである。

これまで学問に従事する特定の研究者の生涯や活動については云々されてきましたが、だとすれば学問それ自体についても言及されてしかるべきではないでしょうか？そもそも研究者が学問のために存在しているのであって、学問が研究者のために存在しているのではないのですから。

ここでしばし、学問それ自体と研究者との違いについて考えてみましょう。先ず第一の違いは、学問は永遠不滅であり、不断に存在すると同時に (それが真の学問なら) 決して一所に留まることなく常に変化している、という点です。しかも、そこには驚くべき特性があるのです。というのも、変化というものはどんなものであれ、すべからず何らかの増大、あるいは減少を前提としたものだからです。この世のありとあらゆる存在は、発展するか、即ちより強固に、より若々しくなってゆくか、あるいは弱体化し、老化し、朽ち果てて行きます。けれど、学問は、驚くべきことに、ひたすら若返ってゆくだけなのです。学問の中で老朽化して行く部分は、より発展した成果の土台として学問の中に留まるのです。真の学問は年齢を知らない、と言っても過言ではありません。九九の表は利用してもしなくてもいいし、またそれを正しく利用することもあれば、そこで過ちを犯すことも有り得ます。しかしながら、九九の表それ自体は、その応用方法の正誤の埒外にあるのです。九九の表自体に時間のカテゴリーをあてはめることはできません。九九の表それ自体は、年齢とは無縁だからです。思いますに、我々が従事している学問には、あらゆる誤謬、無益な探求、数限りないあらゆる欠陥、考えられる限りの様々な実りなき徒労が充満しています。しかし、それは学問の歴史であって、学問そのものではありません。学問そのものは、我々のためにいつでも変わることなく明るく輝いている

のであって、学問の年齢について云々するのは意味のないことなのです。

だとすれば、真の学問に従事する人とは、年齢の埒外に生きる人のことありましょう。彼は物理的には花盛りを迎えては枯れしぼみ、生まれい出ては死んで行きます。けれど、研究者としての彼は、永遠にひたすら花開き続けるだけなのです。もっと正確に言うなら、彼は常に年齢の埒外にあるのです。多くの研究者については、ただその風貌から判断してさえも、彼らは年齢の埒外にあるのだ、としばしば言わざるを得ないほどです。

ここで思い起こしておくべきギリシャ語が一つあります。「アイオン」という語です。この語はいつでも「アエイ（常に）」と「オン（存在）」の合成語として理解されてきました。そこから「アイオン」は「常なる存在」「永遠」を意味するようになりました。「アイオン」のこうした語義解釈は、辞書やギリシャの作家への注釈の中でずっと取り上げられてきたものですし、現在でもよく取り上げられています。しかし、1937年に発表された著名な言語学者バンヴェニストの著書において、この語に関する全く新しい語源解釈が提出されました。バンヴェニストはそこで、この語が、「若い」あるいは「若さ」を意味する「ユ」あるいは「ユン」（ヴァリエーションは様々です）というインド・ヨーロッパ語根を持つことを、明解に証明しています。バンヴェニストによれば、インド・ヨーロッパ諸語において、この語根は珍しいものでは全くありません。この語根は、例えば、「ユヴェニス（若者）」のようなラテン語にも、「ユング（若い）」のようなドイツ語にも、「ジョン（若い）」のようなフランス語にも、さらには「ユーヌィ（若い）」「ユーノシャ（若者）」といったスラヴ語にさえも、見つけることができるのです。しかし、最も興味深いのは、古代ギリシャの思考法が時間的なものと永遠のものを区別する必要に迫られた時、古代ギリシャ語は、永遠という概念を表現するのに、青春を意味する古くからの術語を用いる以上のことは何もできなかつた、ということです。勿論、ギリシャの哲学用語においては、それは単なる「青春」ではなく、「永遠の青春」ということに他なりませんでした。換言すれば、前述した「アイオン」という語は、抽象的な概念としても、「永遠」であると同時に「青春」であるよ

うなものを意味していたということです。陽気なギリシャ人は、パーティーで「こんにちは」という代わりに「楽しんで下さい」と言っていたのと全く同様に、永遠についての思いを巡らす時には、ただ永遠の青春のことだけをその脳裏に思い浮かべていたのです。キリスト教では永遠の平安を祈るのですが、それに対して古代ギリシャの異教徒は、永遠の青春を目指していたのです。術語の歴史に関する諸論文において、私は「アイオン」という術語を十二分に時間をかけて研究してきました。そうして最終的に私は、古代文献学の立場からバングェニストの説に同調せざるを得ませんでした。

一体どのようにして人生がどんどん発展してゆくのか？人生とは子供から大人に、大人から老人へと移行して行く筈のもののように見えるのに、実は人生とは、先に進むほどにより豊かに充実したものになって行くのであり、しかも不断に若返って行くばかりである、とはどういうことか？皆さん不思議に思われることでしょう。もしも私が今から理論的弁証法に取り組むとしたら、そうした可能性を皆さんに証明してみせることができるでしょう。ですが今は、皆さんの注意を複雑極まりない哲学的探索によって煩わすことはしたくありません。ここではただ、永遠の青春という事実そのものは確かに存在するのだということを指摘するのとどめたいと思います。私にとっては、この事実は疑いようのない、確固たる事実です。そして、これは私の学究生活全体から得られた結論なのです。私は学問により一層打ち込んだ時ほど若返り、学問に打ち込むのを止めると、老け込んで行ったのです。学問における永遠の青春のこうした傾向は、私にはいつでも、しかも肉体的にすら感じられていました。だから、もしも私がこれまでかなりの長い人生を営み、かなりの量の著作をものしてきたとすれば、それはひとえに私が常に永遠の青春へと誘われていたからに過ぎないのです。

ですから、私が皆さんに遺訓として言っておきたいのは、もしも永遠に若くありたいのなら、学問における永遠の青春への奉仕を常に怠ることのないように、ということです。学問に不断に親しむことは、皆さん自身を永遠の青春にも親しませてくれるのです。そしてその時、皆さんは何年生きようとも、いつ

でも自分が年齢を超えた存在であると感じることでありましょう。

私にとって学問とは、唯一日常生活と永遠の青春とを両立させることを教えてくれる、堂々とした全知全能の美しき淑女なのです。彼女こそは、唯一信頼するに足る、そしていつでも幾多の永遠の謎に包まれていながら、そうした謎をいつでも永遠に若々しい魅力的な姿で呈示している我らが恋人なのです。今私の脳裏には、ある古い時代の詩人の詩が思い浮かんでいます。その詩人の名前は忘れましたが、彼が歌っていたのは、学問のことではなく、恋人に対する自らの思いの丈でした。その詩を私はここで学問に当てはめてみようと思います。こういう詩です。

ああ、行かないで、唯一無二の貞淑な君、
とろけんばかりの喜びと
全てを知り尽くした喜びに
包まれた君よ。

最後にもう一つ言っておきたいことがあります。

かつて私は旧友に、私には、過ちや欠点は多々あるにしても、一つだけ疑い得ない特性があることを証明しようとしたことがありました。それは、私はいつでも時代の要求の最前線にあらうと努め、いつでも時代に遅れまいとしたきたし、自分の理解の程度に応じて様々な新しい問題の勝利のために闘ってきた、ということでした。その友人は、進歩的であることが必然だとする私の不動の確信に対してこう言いました——「一体全体誰に君の進歩性が必要なんだい？だって、どっちにしたって君には何の反響もないんだからね」。私は返事をする代わりに友人の肩をつかんで、自分の著作が何段か詰まった書架の所に連れて行き、かっとなって尋ねました——「それじゃ一体全体誰が、この400にも及ぶ僕の著作を印刷したんだね？500～800頁もある本を30巻以上も一体誰が印刷したんだね？仮に『古代美学史』一つ取ってみたって、数千頁もあるこの6巻の本は(注)、結局の所一体誰が印刷したのか、是非ともお伺いしたい

ローセフ・アレクセイ・フョードロヴィチ (V. ジダーノフ・鈴木淳一)

もんだね」。友人は万事休して、何か訳の分からないことを口ごもりながら答えたのでした。

研究者なら誰でも、作家なら誰でも、そしてそもそもプロの文学者なら誰でも、たとえ如何なる反響もなくとも、数百、数千頁の作品が何十年もにわたって印刷され続けて行くことによってのみ幸福を味わうのではないのでしょうか。どこかで、いつか、何の反響も得られなかったというような泣き言に私が身を任せるなら、それは私の側からのひどい忘恩行為ということになりましょう。現在レーニン図書館の書架に納まっている私の著作は、私の感謝の気持ちが公明正大であることの強靱な物的証拠なのです。

*注

『古代美学史』は、ローセフの生前は6巻本で、死後7～8巻が一冊にまとめられて追加された。

Ⅶ. ビブリオグラフィー

ビブリオは、〈Контекст—1990〉 (М., 1990, С.55-63)、及び 〈Начала〉 (М., 1993, №2, С.166-169) からの転載である。

001. Эрос у Платона.//Юб. сб. проф. Г.И. Челпанову от участников его семинариев в Киеве и Москве. М., 1916. С.52-79. Вопросы философии. 1988. №12. С.121-139.
002. Два мироощущения. Студенчество жертвам войны. М., 1916. С.105-122.
003. О музыкальном ощущении любви и природы. Музыка. №251/252.
004. Die russische Philosophie//Rußland: Geistesleben, Kunst, Philosophie, Literatur/Hrsg. von V. Erismann-Stepanova et al. Zürich, 1919 S.79-109. Обратный рус. пер.: Век XX и мир. 1988. №2. С.36-44; №3. С.40-47.
005. Античный космос и современная наука. М., 1927. 550 с.
006. Музыка как предмет логики. М., 1927. 262 с.
007. Философия имени. М., 1927. 254 с.
008. Диалектика художественной формы. М., 1927. 250 с. Переиз. Мюнхен, 1983.
009. Диалектика числа у Плотина./Пер., коммент. трактата Плотина “О числах”. М., 1928. 194 с.
010. Критика платонизма у Аристотеля/Пер. и коммент. XIII и XIV книг “Метафизики” Аристотеля. М., 1928. 204 с.
011. Очерки античного символизма и мифологии. М., 1930. Т.1. 912 с.
012. Диалектика мифа. М., 1930. 250 с.
013. Николай Кузанский. Избр. филос. соч. Пер. и примеч. М., 1937. С.158.
014. Литературные источники по Поликтету//Недович Д.С. Поликтет. М.,

ローゼフ・アレクセイ・フョードロヴィチ (V. ジダーノフ・鈴木淳一)

1939. С.87-106.

015. Олимпийская мифология в её социально-историческом развитии//Учён. зап. МГПИ им. В.И. Ленина. 1953. Т.72. С.1-209.
016. Эстетическая терминология ранней греческой литературы: (Эпос и лирика)//Там же. 1954. Т.83. С.37-263.
017. Гесиод и мифология//Там же. С.263-301.
018. Введение в античную мифологию//Учён. зап. Сталинабад. гос. пед. ин-та. Филол. сер. 1954. Вып.5. С.193-306.
019. Античная мифология в её историческом развитии. М., 1957. 620 с.
020. Современные проблемы изучения античной мифологии//Вестн. истории мировой культуры. 1957. №3. С.14-29.
021. Античный хаос.//Meander. 1957. №9 С.283-293. На пол. яз.
022. Problemele actuale ale studierii mitologice antice//Analele Romino-Sovietico istorie. 1958. №1/2 P.5-21.
023. Эсхил//Греческая трагедия. М., 1958. С.43-104.
024. “Первые философы” Дж. Томсона//Томсон Дж. Исследования по истории древнегреческого общества. М., 1959. Т.2. С.332-352.
025. Классическая калокагатия и её типы//Вопр. эстетики. 1960. №3. С.411-475.
026. Гомер. М., 1960. 350 с. Пер. на болг. яз.: София, 1962.
027. Предшественники неоплатонизма и философская проза неоплатонизма//История греческой литературы. М., 1960. Т.3 С.374-396.
028. Podstawowe zagadnienia mitologii antycznej//Euhemer. 1960. №3. S.33-34.
029. Античная музыкальная эстетика. М., 1961. 304 с. Пер. на укр. яз.: Киев, 1974.
030. Эстетическая терминология Платона//Из истории эстетической мысли древности и средневековья. М., 1961. С.17-62.

031. Рец. на кн.: Marot K. Die Anfänge der griechischen Literatur: Vorfragen. Budapest, 1960//Helicon. 1961. №4. На ит. яз.
032. Гибель буржуазной культуры и её философии//Хюбшер А. Мыслители нашего времени/Под общ. ред. А.Ф. Лосева. М., 1962. С.310–354.
033. Аристотель//КЛЭ. М., 1962. Т.1.
034. Эстетика эллинизма: (Статьи и собрание текстов)//История эстетики: Памятники мировой эстетической мысли/Под общ. ред. М.Ф. Овсянникова. М., 1962. Т.1. С.130–234.
035. Рец. на кн.: Lexicon des frühgriechischen Epos/Hrsg. von Snell-Mette//Deutsche Literaturzeitung. 1962. N 2.
036. Рец. на кн.: Menanders Dyscolos/Crit. ed. by J. Bingen//Deutsche Literaturzeitung. 1962. N 2.
037. Автореферат работы по греческой эстетической терминологии//Bibliotheca classica orientalis. 1963. N 2.
038. Главы о древнегреческом эпосе, лирике, Эсхиле, Аристофане, Лукреции, Вергилии, Овидии, а также вступ. и заключ. статьи и библиогр. в изд.: Лосев А.Ф. и др. Античная литература/Под ред. проф. А.А. Тахо-Годи. М., 1963.
039. Древнегреческая мифология//СИЭ М., 1964. Т.5.
040. Философия и эстетика Гераклита//Искусство. 1964. №8. С.72.—Рец на кн.: Кессиди Ф. Гераклит.
041. Художественные каноны как проблема стиля//Вопр. эстетики. 1963. №6. С.351–399. Автореферат работы по античной мифологии//Там же.
042. История античной эстетики: Ранняя классика. М., 1963. 583 с.
043. Рец. на кн.: Kulmann W. Die Quelle der Ilias//Deutsche Literaturzeitung. 1963. N 2.
044. О коммуникативном значении грамматических категорий//Статьи и исследования по языкознанию и классической филологии. М., 1965. С.196–231;

045. О законах сложного предложения в древнегреческом языке//Там же. С.38-130;
046. О законах сложного предложения в латинском языке//Там же. С.131-195;
047. Аристофан и его мифологическая лексика//Там же. С.232-326.
048. История эстетических категорий. М., 1965. 373 с. Пер. на словац. яз.: Братислава, 1978; Пер. на венг. яз.: Будапешт, 1982; Пер. на чеш. яз.: Прага, 1984.
049. О методах изложения математической лингвистики для лингвистов//Вопр. языкознания. 1965. №5 С.13-33.
050. Статьи по истории античной философии для 4-5-го томов “Философской энциклопедии” (М., 1965, 93 с.).
051. Эстетический смысл греческих натурфилософских понятий периода ранней классики//III Всесоюз. конф. по классической филологии. Пленар. заседания: Тез. докл. Киев, 1966.
052. Ирония античная и романтическая//Эстетика и искусство. М., 1966. С.54-84.
053. Логическая характеристика методов структуральной типологии//Вопр. языкознания. 1967. №1. С.62-79.
054. Числовая и структурная терминология в греческой эстетике периода ранней классики//Вопросы античной литературы и классической филологии. М., 1966. С.29-44.
055. Мифология//СИЭ. М., 1966. Т.9.
056. Terminus “sophia” bei Platon//Meander. 1967. N 7/8. S.340-348.
057. О возможности сближения лингвистики классической и лингвистики структуральной//Вопр. языкознания. 1968. №1. С.50-63.
058. Платон. Соч. М., 1968. Т.1/Общ. ред и ред. 1-го тома, вступ. ст. А.Ф. }
068. Лосева. (Жизненный и творческий путь Платона. С.5-73; Вводные замеч. С.74-80; “Апология” Сократа. Личность Сократа: его социально-

политические идеи. С.495–501; “Критон”: Сократический патриотизм. С.509–512; “Ион”: Самобытность философского познания и его свобода от иррационализма. С.515–518; “Гиппий больший”: Идеальное познание общего как закона для единичного. С.522–526; “Протагор”: Идея как принцип смысловой структуры. С.532–543; “Горгий”: Идея как принцип структурности жизни. С.553–558; “Менон”: Объективная реальность общеродовой идеи как закона для единичного, или первый набросок объективного идеализма. С.557–583. “Кратил”: Формы субъективно-человеческого функционирования объективно-реальной идеи—вещь, идея, тип-образец, имя. С.594–605.)

069. Введение в общую теорию языковых моделей: Учеб. пособие. М., 1968. 294 с.
070. Проблема Вагнера в прошлом и настоящем//Вопр. эстетики. 1968. №8. С.67–196.
071. Платон//КЛЭ. М., 1968. Т.5.
072. Статьи в “Философской энциклопедии” (Т.1–5. М., 1957–1970): Аврелий
172. (Марк Аврелий), Агриппа, Академия платоновская, Александрийская школа, Анаксагор, Аполлоний Тианский, Ареопагитики, Бытие, Валентин, Варрон, Василид, Гален, Гармония, Гераклит Эфесский, Гиппий из Элиды, Гиппократ Касский, Гностицизм, Гомеомерия, Гораций, Дамаский, Диоген Аполлонийский, Диоген Лаэртский, Диоген Синопский, Древнегреческая религия и мифология, Древнеримская религия и мифология, Дух, Зенон Элейский, Интуиция, Иоанн Дамаскин, Калликл, Калокагатия, Канон, Карнеад, Катарсис, Категория, Клеанф, Космос, Кратил, Ксенофан Колофонский, Ксенофонт Афинский, Логика диалектич., Логос, Лукиан, Макробий А., Марин из Сихема, Марциан Капелла, Мелисс Самосский, Мера, Мимесис, Мифология, Неопифагореизм, Неоплатонизм, Нигидий Фигул, Нумений, Нус, Олимпиодор Младший, Олимпиодор Старший,

Ориген, Панеций, Парменид, Пафос, Перипатетическая школа, Пиррон из Элиды, Пифагор Самосский, Пифагореизм, Платон Афинский, Платонизм, Плотин, Порфирий, Посидоний, Прокл, Протагор, Римская философия, Саллюстий, Секстий К., Сенека Л., Символ в эстетике, Симпликий, Сириан Александрийский, Сократ, Софисты, Спевсипп, Стоицизм, Стоя, Теогония, Трагическое, Филон Александрийский, Филон, Хаос, Целлер, Цицерон, Эйдос, Эклектизм (античный), Элейская школа, Элидоэри-трейская школа, Эманация, Этос, Эстетика, Юлиан, Ямбул, Ямвлих.

173. История античной эстетики: Софисты, Сократ. Платон. М., 1969. 715 с.
174. Лексика древнегреческого учения об элементах//Вопросы филологии: К семидесятилетию со дня рождения проф. И.А. Василенко. М., 1969. С.233-241.
175. Плотин. Эннеады (пер.: I 3,4-5; II 4, 2-8; IV 8, 3-4. 7-8. 11; V 2, 1-2; III 8, 10; VI 9, 9)//Антология мировой философии. М., 1969. Т.1. С.538-554.
176. Прокл. Первоосновы теологии (пер. 211 тезисов)//Там же. С.554-576.
177. Ewolucja pojęcia nocy w starożytności na tle przemian społeczno-historycznych//Meander. 1969. N 3. S.103-115.
178. Античный эфир//IV конф. по классической филологии: Тез. докл. Тбилиси, 1969. С.70.
179. До питання про виникнення середньовічної діалектики на основі номіналізму//Филос. думка. 1970. №3. С.39-50.
180. Природа у Гераклита//Природа. 1970. №6. С.44-50.
181. Язык как орудие общения в свете ленинской теории отражения//Учён. зап. МГПИ им. В.И. Ленина. 1970. №372. С.208-224; Пер. на англ. яз.: Soviet studies in Literature. 1984. Vol.20, N 2/3.
182. Проблема символа в связи с близкими к нему литературоведческими категориями//Изв. АН СССР. Сер. лит. и яз. 1970. Т.29, вып.5. С.377-

390.

183. Платон. Соч. М., 1970. Т.2. 610 с./Общ. ред. совм. с В.Ф. Асмусом и
 191. сост. (Вводные замечания. С.5-9; “Федон”: Теория эйдоса жизни. С.481-497; “Пир”: Учение о пределе. С.505-513; “Федр”: Учение об идее как о порождающей модели. С.531-539; “Теэтет”: Критика сенсуалистических теорий познания. С.550-558; “Софист”: Диалектика бытия и небытия как условие возможности различения истины и лжи. С.567-576; “Парменид”: Диалектика одного и иного как условие возможности существования порождающей модели. С.585-594).
192. О пределах применимости математических методов в языкознании: (О сравнительной характеристике языкового и математического знака)//Ленинизм и теоретические проблемы языкознания. М., 1970. С.184-195.
193. О нецелесообразности математических обозначений в лингвистике//Учён. зап. МГПИ им. В.И. Ленина. 1970. №403. С.5-25; Критические замечания по поводу современных знаковых теорий языка//Там же. С.26-40.
194. Символ и художественное творчество//Изв. АН СССР. Сер. лит. и яз. 1971. Т.30, вып.1 С.3-14.
195. Хтоническая ритмика аффективных структур в “Энеиде” Вергилия//Симпозиум “Проблемы ритма, художественного времени и пространства в литературе и искусстве”: Тез. и аннот. Л., 1970. С.26-28
196. Elemente des körperlichen Verständnisses der Wirklichkeit in der Ideenlehre Platons//Philologus. 1970. Bd. 114. S.9-27.
197. Платон. Соч. М., 1971. Т.3, ч.1. 686 с./Общ. ред. совм. с В.Ф. Асмусом
 201. и сост. (Вводные замечания. С.5-8; «Филеб»: Общая диалектика идеи как порождающей модели. С.563-572; «Тимей»: Мифологическая диалектика космоса. С.647-660; «Критий»: Идеализация старины в «Критии». С.676-679).
202. Стойхейон: Древнейшая история термина//Учен. зап. МГПИ им. В.И.

ローゼフ・アレクセイ・フョードロヴィチ (V. ジダーノフ・鈴木淳一)

Денина. 1971. №450. С.18-26.

203. Античная ночь и социально-историческое сознание древних//Acta conventus XI Eirene. W-wa, 1971. P.355-366.
204. Проблема соматического значения платоновских идей//Филос. думка. 1971. №6. С.57-68.
205. Les mouvements affectifs exaltés dans l'Eneide: Leurs sens philosophique et stylistique//Vergiliana: Recherches sur Virgile par H. Bardon et R. Verdière. Leiden, 1971. P.192-211.
206. Платон. Соч. М., 1972. Т.3, ч.2. 677 с./Общ. ред. совм. с В.Ф. Асмусом
211. и сост. 1971. (Вводные замечания. С.5-8; «Политик»: Космологическо-политическое учение о законе как завершение платоновского идеализма в диалоге «Политик». С.571-579; «Законы»: Абсолютистское завершение платоновского идеализма в «Законах». С.583-601; «Послезаконие»: Числовая мудрость в диалоге «Послезаконие». С.633-638. Письма//Там же. С.639-641).
212. Диалектика символа и его познавательное значение//Изв. АН СССР. Сер. лит. и яз. 1972. Т.31, вып.3. С.228-238.
213. Эстетика хороводов в «Законах» Платона//Античность и современность: К 80-летию Ф.А. Петровского. М., 1972. С.133-152.
214. Прокл. Первоосновы теологии/Пер. и коммент. А.Ф. Лосева. Тбилиси, 1972. 175 с.
215. О понятии и социально-исторической природе символа и мифа//Іноземна філологія. Львів, 1972. С.67-72.
216. Катарсис: Историко-семасиологический этюд//Проблемы общего и русского языкознания. М., 1972. С.3-19.
217. L'esthétique de la probabilité, ou de la relativité//XXI^e Conférence internationale du comité «Eirene»: Résumés des communications. Cluj, 2-7 octobre, 1972.

218. Логика символа//Контекст-1972. М., 1973. С.182-217. Пер. на англ. яз. —1984.
219. Платоно-аристотелевский стойхейон//Іноземна філологія. Львів, 1973. Вып.32. С.83-87.
220. О понятии художественного канона//Проблемы канона в древнем и средневековом искусстве Азии и Африки. М., 1973. С.6-15.
221. Эстетика символической выразительности у Аристотеля//Искусство слова. М., 1973. С.298-305.
222. Аксиоматика знаковой теории языка//Вопросы грамматики и лексики русского языка. М., 1973. С.22-55.
223. Античная литература. Под ред, А.А. Тахо-Тоди. 2-е изд. М., 1973; 3-е изд. М., 1979; 4-е изд. М., 1986. Главы: Античная мифология, Гомеровский эпос, Гесиод, Классическая лирика, Происхождение драмы, Эсхил, Происхождение и развитие комедии до Аристофана, Аристофан, Платон, Лукреций, Вергилий, Овидий, Общее заключение. Пер. на лит. яз.: Вильнюс, 1973; Пер. на укр. яз.: Киев, 1976.
224. De la naissance du scepticisme au fond du platonisme//XIII^e congrès international du comité «Eirene». Dubrovnic: Résumés des communications. Skopje, 1974.
225. О противоречивости основного принципа асемантического структурализма//Вопросы филологии. М., 1974. С.127-135.
226. О понятии аналитической лингвистики//Исследования по русскому языку и языкознанию. М., 1974. С.6-36.
227. Диалектика Гегеля и античный неоплатонизм//Докл. X Междунар. гегелевскто конгр. М., 1974. Вып.2. С.30-40.
228. Социально-исторический принцип изучения античной философии//Проблемы методологии историко-философского исследования. М., 1974. Вып.1. С.4-45.

229. О специфике эстетического отношения античности к искусству//Эстетика и жизнь. 1974. №3. С.376-421.
230. История античной эстетики. Высокая классика. М., 1974. 598 с.
231. Хтоническая ритмика аффективных структур в «Энеиде» Вергилия//Ритм, пространство и время в литературе и искусстве. Л., 1974. С.143-159.
232. Обзор некоторых главнейших негативных конструкций соотношения языкового знака и языкового значения//Русский язык. М., 1975. С.202-215.
233. Учение о «лектон» в языкознании античных стоиков//Античная балканистика: Предварительные материалы. М., 1975. С.17-20.
234. Рец. на кн.: Кессиди Ф.Х. От мифа к логосу: (Становление греческой философии). М., 1972//Филос. науки. 1975. №2. С.182-185.
235. Античный эфир в связи с основным античным модельно-порождающим принципом мысли//Проблемы античной культуры. Тбилиси. 1975.
236. Историческое время в культуре классической Греции//История философии и вопросы культуры. М., 1975. С.7-61.
237. История античной эстетики: Аристотель и поздняя классика. М., 1975. 776 с.
238. Секст Эмпирик. Соч.: В 2 т./Общ. ред., вступ. ст. и пер. с древнегреч. А. Ф. Лосева. М., 1975. Т.1. 400 с., М., 1976. Т.2. 421 с.
239. Передовые тенденции античного неоплатонизма//XIV Междунар. конф. античников социалистических стран: Тез. докл. Ереван. 1976.
240. Учение о словесной предметности (лектон) в языкознании античных стоиков//Вопросы семантики русского языка. М., 1976. С.4-22.
241. Семантика языка и его структуральное значение//Сборник трудов по русскому языку и языкознанию. М., 1976. Вып.2. С.4-33.
242. Проблема символа и реалистическое искусство. М., 1976. Т.35. №5. С.395-407.
243. Символ и его социально-историческое значение//Проблемы русской фило-

- логии. М., 1976. С.17-23.
244. Специфика языкового знака в связи с пониманием языка как непосредственной действительности мысли//Изв. АН СССР. Сер. лит. и яз. 1976. Т.35. №5. С.395-407.
245. О бесконечной смысловой валентности языкового знака//Изв. АН СССР. Сер. лит. и яз. 1977. Т.36. №1. С.3-8.
246. Античная философия истории. М., 1977. 207 с.
247. Материалы для построения современной теории художественного стиля// Контекст-1975. М., 1977. С.211-240.
248. Статьи в БСЭ. 3-е изд.: Академия Платоновская, Анаксагор, Ареопажитики, Гармония, Гераклит, Гностицизм, Греция Древняя (религия и мифология), Диалектика, Зенон Элейский, Кратил, Ксенофан, Мегарская школа, Мелисс Самосский, Неоплатонизм, Николай Кузанский, Нус, Парменид, Перипатическая школа, Пиррон, Пифагореизм, Платон, Платонизм, Плотин, Порфирий, Посидоний, Прокл, Протагор. Рим Древний (философия), Сократ, Софисты, Стоицизм, Трагическое, Фалес, Филон Александрийский, Целлер, Эйдос, Элейская школа, Энтелехия, Ямвлих.
286. 287. Платон. Жизнеописание. М., 1977. 233 с. Совм. с А.А. Тахо-Годи.
288. Специфика языкового знака//Обществ. науки. 1977, №4. С.154-169.
289. О специфике эстетического отношения к искусству античности.//Сабчота Хеловнеба. 1977. №6. С.59-67; №7. С.65-73. На груз яз.
290. Аксиоматика теории специфического языкового знака: (Стихийность знака и ее отражение в сознании)//Проблемы общего и русского языкознания. М., 1978. С.22-49.
291. Завершающее античное определение красоты в контексте других философско-эстетических категорий//Творческий процесс и художественное восприятие. Л., 1978. С.31-43.
292. Эстетика Возрождения. М., 1978. 632 с; 2-е изд. М., 1982.

293. Античные теории стиля в их историко-эстетической значимости// Античные риторики. М., 1978.
294. Исторический смысл эстетического мировоззрения Рихарда Вагнера// Вагнер Р. Эстетика. М., 1978.
295. Аверинцев//КЛЭ. М., 1978. Т.9.
296. Скептические элементы в философии Платона и Аристотеля//Византиноведческие этюды. Тбилиси, 1978. С.31-36.
297. Начальные стадии неоплатонической эстетики Ренессанса. Типология и периодизация культуры Возрождения. М., 1978. С.61-83.
298. Терминологическая многозначность в существующих теориях знака и символа. Языковая практика и теория языка. М., 1978. Вып.2. С.3-26.
299. История античной эстетики: Ранний эллинизм. М., 1979. 819 с.
300. Аксиоматика теории языкового знака в плане его специфики//Проблемы развития и современного состояния русского языка. М., 1979. С.3-22.
301. Платоновский объективный идеализм и его трагическая судьба//Платон и его эпоха. М., 1979. С.9-57.
302. Диоген Лаэртский и его метод//Диоген Лаэртский. О жизни, учениях и изречениях знаменитых философов. М., 1979. С.5-59; 2-е изд. М., 1986.
303. Две необходимые предпосылки для построения истории эстетики до возникновения эстетики в качестве самостоятельной дисциплины//Эстетика и жизнь. М., 1979. С.221-238.
304. Эллинистически-римская эстетика I-II вв. н.э. М., 1979. 415 с.
305. О пропозициональных функциях древнейших лексических структур//Проблемы современной и исторической лексикологии. М., 1979. С.3-13
306. Античная риторика//Античная литература/Под ред А.А. Тахо-Годи. 3-е изд. М., 1979.
307. Николай Кузанский. Соч.: в 2 т. М., 1979. Т.1. С.385-443 (пер. трактата "Простец об уме"); М., 1980. Т.2. С.135-248 (пер. трактатов: "О

возможности-бытия”, “О неинном”).

308. Философско-исторический подвиг Давида Непобедимого//Ист.-филос. журнал АН Арм ССР. 1980 №1. С.40–51. На арм. яз.
309. Философско-исторический подвиг Давида Непобедимого. Ереван. 1980. 13 с. Переизд. в кн.: Давид Непобедимый—великий философ древней Армении. Ереван, 1983. С.40–51; Философия Давида Непобедимого. М., 1984. С.26–35.
310. Методология изучения Платона у Прокла//Историчность и актуальность античной культуры. Тез. докл. Тбилиси, 1980. С.95–96.
311. История античной эстетики: Поздний эллинизм. М., 1980. 766 с.
312. Философский словарь/Под ред. И. Фролова. 4-е изд. М., 1988. Статьи:
332. Александрийская школа, Антисфен, Ареопагитики, Аркесилай, Боэций, Бытие, Гераклид, Гомеомерия, Действительность, Диоген-киник, Досократики, Идея, Карнеад из Кирены, Ксенофан, Нус, Объективная идея, Реальность, Существование, Сущность, Тропы, Энесидем.
333. Мифы народов мира: Энциклопедия: В 2 т. М., 1980. Т.1; 2-е изд. М., 1988.
346. Статьи: Греческая мифология, Амбросия, Ананка, Аполлон, Арес, Афина, Афродита, Гефест, Гипербореи, Демиург (античный), Демон, Дионис, Европа, Зевс.
347. Элементарные структурно-числовые модификации//Сабчота Хеловнеба. 1980. №12. С.72–79. На груз. яз.
348. История философии как школа мысли//Коммунист. 1981. №11. С.56–66.
349. О понятии языковой валентности//Изв. АН СССР. Сер. лит и яз. 1981. Т.40. №5. С.403–412.
350. Диоген Лаэртский—историк античной философии. М., 1981. 192 с.
351. О поэтическом образе//День поэзии. М., 1981. С.69–70. Пер. на анги. яз. —1984.
352. Нахов И.М. Книжечная литература. М., 1981/Вступ. ст. и отв. ред. А.Ф.

Лосева.

353. Знак. Символ. Миф: Труды по языкознанию. М., 1982. 478 с.
354. Сокровище мыслящих//Студ. меридиан. 1982. №4. С.28; Как же научиться думать//Там же. С.29-32.
355. Мифы народов мира: Энциклопедия В 2 т. М., 1982. Т.2; 2-е изд. М., 1987.
378. Статьи: Коронида, Корибанты, Кронос, Лапифы, Лето, Марсий, Минотавр, Мойры, Музы, Ночь, Одиссей, Орфей, Орфизм, Пан, Персефона, Посейдон, Прометей, Психея, Сирены, Титаны, Тифон, Уран, Фемида, Хаос.
379. И думать и делать//Студ. меридиан. 1982. №9. С.18-22.
380. Диалектика творческого акта: (Краткий очерк)//Контекст-1981. М., 1982. С.48-78. Пер. на англ. яз.—1984.
381. Проблема художественного стиля: Что не есть художественный стиль. Статья 1//Жанр и проблема диалога. Махачкала, 1982. С.3-26.
382. Аристотель: Жизнь и смысл. М., 1982. 286 с. Совм. с. А.А. Тахо-Годи.
383. Исторический смысл эстетики Возрождения//Эстетика и жизнь. М., 1982. Вып.7. С.141-225.
384. Проблема вариативного функционирования живописной образности в художественной литературе//Литература и живопись. М., 1982. С.31-65. Пер. на англ. яз.—1984.
385. Диалектика и здравый смысл//Студ. меридиан. 1982. №12. С.27-31.
386. Historický čas v kultuře klasického Řecka: (Platon a Aristoteles)//Kultura v zrcadle dějin filozofie. Pr., 1982. S.21-80.
387. Философский энциклопедический словарь. М., 1983. Статьи: Диалектика.
388. Трагическое.
389. Плутарх: Очерки жизни и творчества//Плутарх. М., 1983.
390. Владимир Соловьёв. М., 1983. 208 с. (Мыслители прошлого).
391. Языковая структура. М., 1983. 375 с.
392. Проблемы художественного стиля: Что не есть художественный стиль.

- Статья 2//Жанр романа в классической и современной литературе. Махачкала, 1983. С.6-18.
393. Одно из самых глубоких наслаждений в жизни...//Альманах библиофила. М., 1983. С.22-32. Переизд.: Собеседник. 1984. №5. С.232-242.
394. О значении истории философии для формирования марксистско-ленинской культуры мышления//А.Ф. Лосеву: К 90-летию со дня рождения. Тбилиси. 1983. С.142-155.
395. Двенадцать тезисов об античной культуре//Студ. меридиан. 1983. №9. С.13-14; №10. С.14-16.
396. Типы отрицания отрицания//Диалектика отрицания отрицания. М., 1983. С.149-170.
397. Некоторые терминологические уточнения в области законов диалектики// Там же. С.294-303.
398. Беседа с проф. А.Ф. Лосевым/Вопр. философии. 1984, №1. С.144-149.
399. О вечной молодости в науке//Студ. меридиан. 1984. №5. С.22.
400. Как научиться быть учеником//Комс. правда. 1984. 1 сент.
401. Борьба со скукой/Студ. меридиан. 1984. №9. С.35-37; №10. С.34-35.
402. Дерзание духа: Разговор с интересным собеседником/Беседу с А.Ф. Лосевым вели Н. Мишина и Ю. Ростовцев//Правда. 1985. 17 янв.
403. Творчество Боэция как переходный антично-средневековый феномен// Западноевропейская средневековая словесность: Тез. докл. М., 1985. С.25-27.
404. Об интеллигентности//Студ. меридиан. 1985. №3. С.34-35.
405. Виток бесконечности//Сел. молодёжь. 1985. №4. С.28-29.
406. Древнегреческий термин *techne* в доплатоновский период античной эстетики//Проблемы изучения культурного наследия. М., 1985. С.294-297.
407. Что такое чудо?//Студ. меридиан. 1985. №9. С.12-14.
408. В поисках смысла//Вопр. лит. 1985. №10. С.205-31.

409. La dialectique de Platon et sa portée culturelle historique//La Philosophie greque et sa portée culturelle et historique. Moscou, 1985. P.118-138.
410. Античная эстетика в её исторической специфике//История эстетической мысли. Древний мир. Средние века. М., 1985. Т.1. С.148-239.
411. Платон. Диалоги/Сост., ред. и вступ. ст. А.Ф. Лосева; Пер. С.Я. Шейнман Топштейн. Комментар. А.А. Тахо-Годи. М., 1986. 607 с.
412. Ранние диалоги Платона и сочинения платоновской школы//Там же.
413. Слово о грузинском неоплатонизме//Лит. Грузия. 1986. №6. С.136-143.
414. О единстве трёх понятий//Студ. меридиан. 1986. №9/10. С.30-33.
415. Туру negácie//Dialektika negácie, Pr. 1985. S.113-128.
416. Niektoré terminologické spresnenia v oblasti zakonov dialektiki//Ibid. S.221-228.
417. Теоретический источник марксизма (рец. на кн.: Гулыга А.В. Немецкая классическая философия. М., 1986)//Новый мир. 1986. №1. С.261-263.
418. Что даёт античность: Диалог с проф. Лосевым//Лит. учёба. 1986 №6. С.81-88.
419. Конструктивный смысл ареопагитского первоначала//Ареопагитические разыскания/Сост. Д. Сумбадзе; Ред. Г. Тевзадзе. Тбилиси, 1986. С.24-30.
420. Значение ареопагитик и их изучение//Там же. С.15-16.
421. Поэзия, Мировоззрение, Миф//Лит. газ. 1987. 11 февр.
422. Об одном античном термине, лежащем в основе последующей философии// Античная балканистика/Отв. ред. Л.А. Гиндин. М., 1987. С.73-77.
423. Съкровище на мислензите//Антени. 1987. 1 апр. На болг. яз.
424. Вечната младост “Ст. М.” към младите българи//Антени. 1987. 27 мая.
425. Что читать по античной культуре//Студ. меридиан. 1987. №7. С.44-49.

426. Владимир Соловьёв и его ближайшее литературное окружение//Лит.
427. учёба. 1987. №3. С.151-164; №4. С.159-168.
428. Несколько пожеланий студенчеству текущего дня/Студ. меридиан, 1987.
№9. С.43.
429. Понимание стиля от Бюффона до Шлегеля//Лит. учёба. 1988. №1. С.153-
167.
430. Корень учения горек, но плоды его сладки//Студ. меридиан. 1988. №4.
С.30-32.
431. Вспоминая Флоренского//Лит. учёба. 1988. №2. С.176-179.
432. Античная философия и общественно-исторические формации: Два очерка//
Античность как тип культуры. М., 1988. С.5-77.
433. Типы античного мышления//Там же С.78-104.
434. Реальность общего: Слово о Кирилле и Мефодии//Лит. газ. 1988. 8 июня.
435. История античной эстетики: Последние века. М., 1988. Кн.1. 366 с.
436. Дерзание духа/Сост. и послесл. Ю.А. Ростовцева. М., 1988. 366 с.
437. Расцвет и падение номинализма: Мыслительно-нейтралистская диалектика
XIV в.//Изв. Сев.-Кавк. науч. центра высш. шк. обществ. науки. 1988.
№2. С.68-81.
438. Из бесед и воспоминаний//Студ. меридиан. 1988. №8. С.21-27; №9.
441. С.37-41; №10. С.23-26; №12. С.23-26.
442. Понимание стиля у Гегеля и позитивистов//Лит. учёба. 1988. №4. С.159-
164.
443. Теория стиля у модернистов//Лит. учёба. 1988. №5. С.153-160.
444. Творческий путь Владимира Соловьёва//Соловьёв Вл. Соч.: в 2 т./Сост.,
общ. ред. и вступ. статьи А.Ф. Лосева и А.В. Гулыги. М., 1988. Т.1. С.3-
32.
445. “Он сердечно любил Россию”: Беседа с современным философом//Наше
наследие. 1988. №2. С.69-70.

446. Письмо к Н.М. Тарабукину от 15/1-1956 г.//К столетию со дня рождения Н.М. Тарабукина/Публ. А. Дунаева//Декоративное искусство. 1989. №10. С.29.
447. Диалектика мифа: Отрывки из книги “Диалектика мифа”//Родина. 1989. №10. С.95-96.
448. Поэзия. Мироззрение. Миф.//Пушкинист. М.,—М., 1989. Вып.1.
449. Вл. Соловьёв и него-вото наи-близко литературно обкръжение//Литературна мисъл. 1989. Кн.2. С.99-117. (на болг. языке)
450. Из лагеря в лагерь: Письма А. Лосева к В. Лосевой//Наше наследие. 1989. №5. С.79-92.
451. В поисках собственного мироззрения: Из последних бесед с А.Ф. Лосевым/Беседу вёл Ю.А. Ростовцев. 33 Альманах “Поэзия”. 1989 №54. С.138-144.
452. Проблемът за символа и реалистичното изкуство.—София, 1989. 439 с.
453. Реальность общего//Альманах библиофила: Книга и жизнь.—М., 1989. №26. С.228-229.
454. Жизнь: Повесть//Юность. 1989. №4. С.14-17; №5. С.78-93.
455. Русская философия//Новый журнал.—Нью-Йорк, 1989. №175. С.278.
456. Родина: Фрагмент из повести “Жизнь”//Литературная газета. 1990. 24 января.—№4. С.6.
457. Кълтурата като проблем на философията на историята//Идеи в културологии/Сост. И. Стефанов, Д. Гинев. Т.1—София, 1990.
458. Социальная природа платонизма: Фрагмент из “Очерков античного символизма и мифологии”//Свет (Природа и человек). 199. №3. С.62.
459. Из размышлений о Вл. Соловьёве: Из последних бесед с А.Ф. Лосевым/Альманах “Поэзия”. 1990. №55. С.196-204.
460. Макробии и М. Капелла—филосуфствуващи писатели поздней античности//Вопросы классической филологии: Античность в контексте со-

временности. Вып. 10.—М., 1990.—С.5-33.

461. Из воспоминаний//Студенческий мередиан. 1990. №5. С.29-32.
462. Страсть к диалектике. М., 1990, 320 с.
463. Модернизм и современные ему теории: Глава из рукописи “Теория художественного стиля”//Контекст-90.—М., 1990. С.25-55.
464. П.А. Флоренский по воспоминаниям Алексея Лосева/Там же. С.6-24.
465. Диалектика мифа: Отрывки из книги “Диалектика мифа”/Опыты. М., 1990.
466. Losev A., Takho-Godi A. Aristotel.—Moscow, 1990.—199 p.
467. Losev A., Takho-Godi A. Plato.—Moscow, 1990.—189 p.
468. A. Losevs Mita dialectika: Fragmenti//Gramata.—Riga, 1990. N 7.
469. Два мироощущения//Дон. 1990. №4. С.13-17.
470. Классицизм//Литературная учёба. №4. С.169-174.
471. Романтизм//Литературная учёба. №6. С.139-145.
472. Основные особенности русской философии//Студенческий мередиан. 1990. №9. С.20-22.
473. Из ранних произведений.—М., 1990. 655 с.
474. Философия имени.—М., 1990.—269 с.
475. О применении в языкознании современных общенаучных понятий//Res philologica.—М., 1990. С.163-169.
476. Соловьёв Вл. Сочинения: В 2 т. М., 1990.—894 с.
477. Магия в понимании П.А. Флоренского//Флоренский П.А. Сочинения.—Т.2.: У водорозделов мысли.—М., 1990.—С.278-280.
478. Основной вопрос философии музыки//Советская музыка. 1990. №11-12.
479. Платон. Собрание соч.: В 4 т. Вст. ст. и статьи к диалогам А.Ф. Лосева.—М., 1990.
480. Диалектика мифа//Новый журнал (Нью-Йорк). 1990. №180-181.
481. О музыкальном ощущении любви и природы//Известия СКНЦ. сер.

ローセフ・アレクセイ・フョードロヴィチ (V. ジダーノフ・鈴木淳一)

Общественные науки. 1990. №2. С.25-36.

482. Вл. Соловьёв и его время.—М., 1990.—720 с.

483. Из размышлений о Вл. Соловьёве//Владимир Соловьёв и его время. М., 1990. 720 с.

484. Диалектика мифа: Фрагмент//Бюллетень общеобразовательного отделения РОУ.—М., 1990.

485. Западная конструктивно-языковая диалектика VI-XI вв.//Известия СКНЦ. Сер. Общественные науки. 1990. №3. С.25-35.

486. В поисках смысла//Монологи и диалоги. Т.2.—М., 1990.

487. В поисках смысла: Из бесед А.Ф. Лосева//Социум. 1991. №1. С.92.

488. Атеизм его происхождение и влияние на науку и жизнь: Из записок А. Лосева. Новочеркасск. 16-17 июня 1909 г.//Студенческий мередиан. 1991. №5.

489. Философия. Мифология. Культура.—М., 1991. 525 с.

490. Русская философия//Русская философия: Очерки истории. т.1. Свердловск, 1991. 592 с.

491. Загадка Сократа//*φιλοσοφια*. Списание за учениям.—София, 1991. №1. 592 с.

492. Встреча: Роман//Дружба народов. 1991. №3. С.183-240.

493. Признавая абсолютную истину//Студенческий мередиан. 1991. №10.

494. Путь к цельному знанию//Альманах “Поэзия”. 1991. №58. С.203.

495. Диалектика мифа//Новый журнал.—Нью-Йорк, 1991.—№182. №183, 184-185.

496. Первая книга о В.В. Розанове//Москва. 1991. №10. С.135-136.

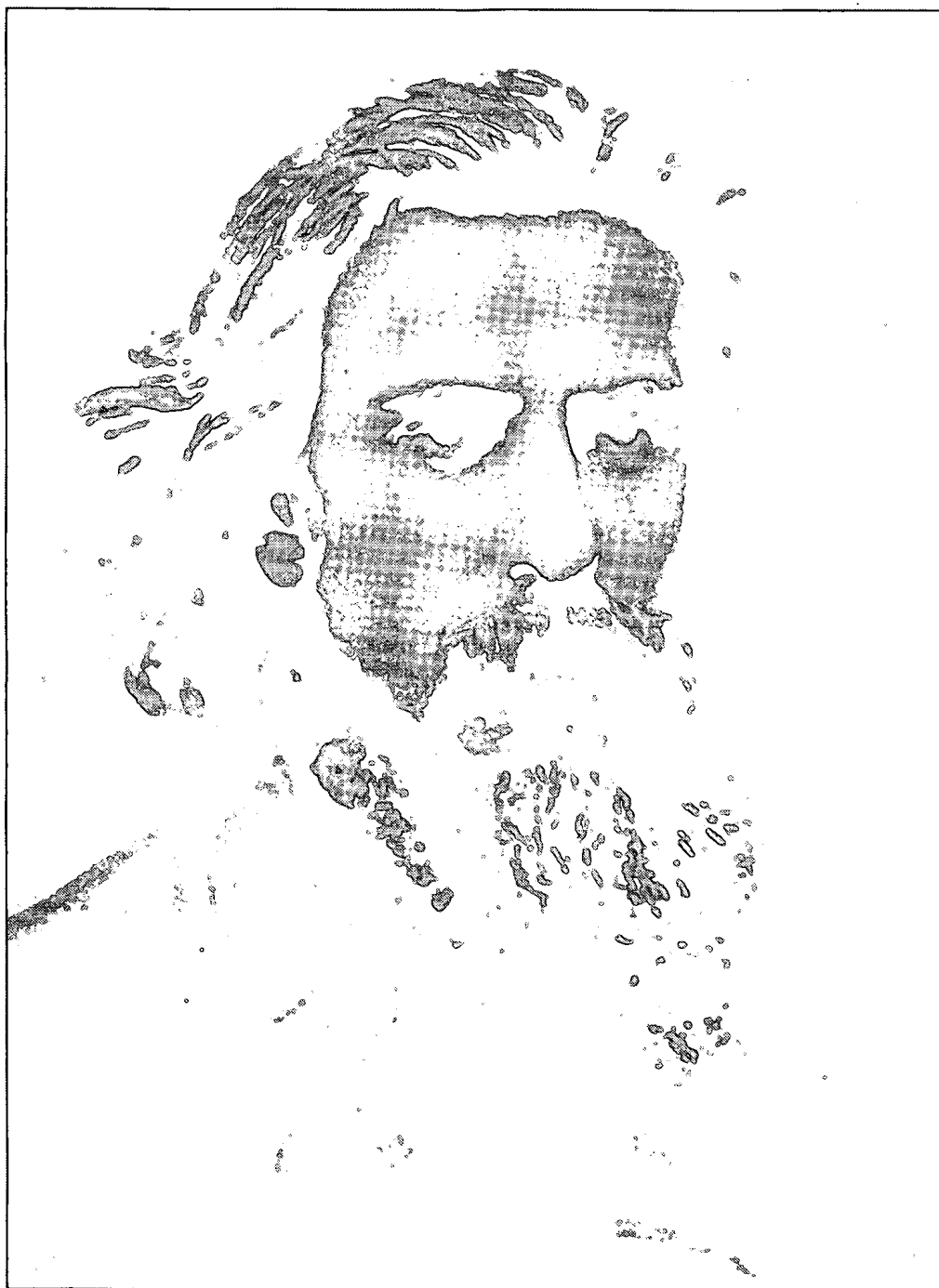
497. А.Ф. Лосев о Флоренском/Русское зарубежье в год тысячелетия крещения Руси.—М., 1991.—Разд. “Пастыри и подвижники”.

498. Трио Чайковского. Гл.1//Звезда. 1991. С.145-149.

499. Специфика на античната култура//Мит и философия.—София, 1991.

500. A. Losevs vestules no legere//Kentaurs XXI.—Riga, 1992.—N 1.
501. Театрал: Рассказ//Москва. 1992. №2-4. С.69-85.
502. Первозданная сущность//Символ. Париж, 1992. №27, С.255.
503. Из рассказов А.Ф. Лосева/Вопросы философии. 1992. №10.
504. Заметки о книгах/Апокриф. 1992. №1. С.114-118.
505. История эстетических учений//Мировое древо. 1992. №1.
506. Трио Чайковского: Фрагмент//Музыкальная жизнь. 1992. №19-20.
507. Реалността на общото//Культура. 1992. 22 мая С.8.
508. Когда кончал гимназию//Студенческий мередиан. 1992. №9.
509. Из разговоров на Беломорстрое//Согласие. 1992. №10-11.
510. Музыка множит тоску//Россия. 1992. 11-17 ноября. С.12.
511. Не весте ли яко храм божий есте//Юность. 1992. №9. С.59.
512. Трио Чайковского: Роман//Новый журнал, Нью-Йорк, 1992. №188.
513. Родина: Фрагмент из повести “Жизнь”//Русская идея. М., 1992. С.421
514. Научиться мыслить—вполне возможное дело//Эврика. 1993. №1.
515. Женщина-мыслитель: Роман//Москва. 1993. №4. С.98-119.
516. Жизнь: Повести, рассказы, письма.—СПб., 1993.
517. Письма А.Ф. Лосева М.В. Юдиной//Москва. 1993. №8.
518. Миф—развёрнутое магическое имя//Символ. Париж., 1993. №28.
519. Абсолютная диалектика—абсолютная мифология//Абсолютный миф Алексея Лосева: Сборник. М., 1993.
520. Первозданная сущность//Там же.
521. Миф развёрнутое магическое имя//Там же.
522. Бытиё. Имя. Космос.—М., 1993.
523. Либерализм: Фрагмент из «Очерков античного символизма и мифологии»// Юность. 1993. №4.

ヴラデーミル・ソロヴィヨーフ
Вл. Соловьев



アレクセイ・ローセフ
Алексей Лосев.

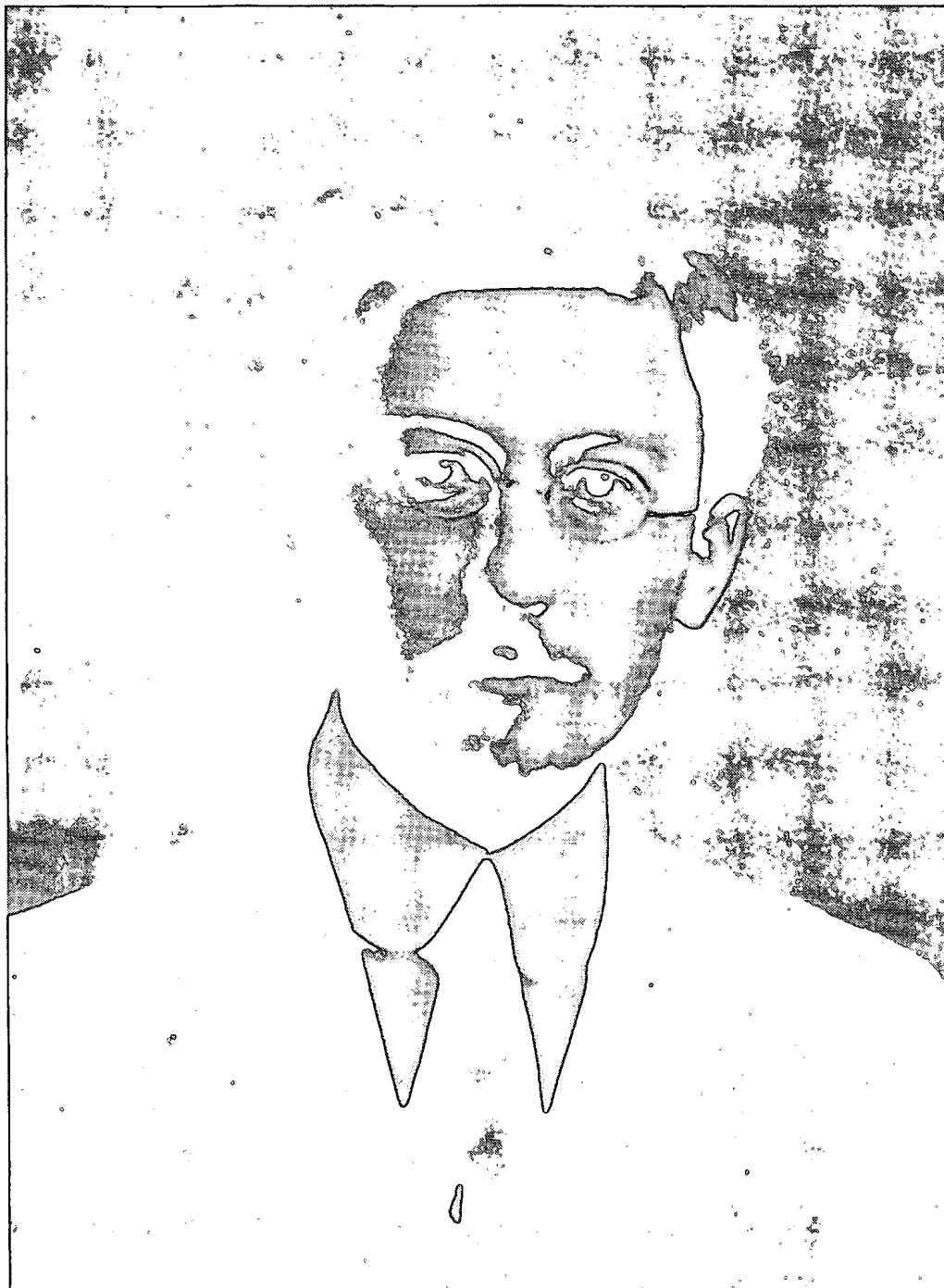


1903 г.



1915 г.

Алексей Лосев.



1921 г.

ワレンチーナ・ローセワ
В.М. Лосева.

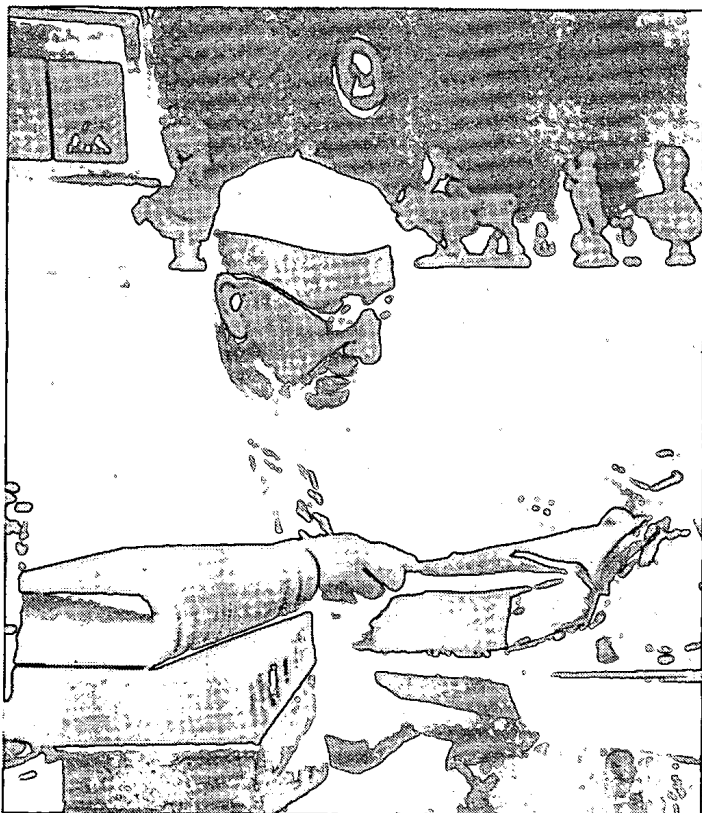


20-е годы



Около 1933 г., после лагеря

А.Ф. Лосев



1961 г.



1984 г.